

同志社女子大学



FD レポート

Faculty Development

第 7 号

2014. 3.

CONTENTS

巻頭言◆

『FD レポート』第7号の刊行によせて 学長 加賀 裕郎 1

2013 年度 FD 講習会◆

講演『学生の目の色が変わる授業の仕方を内緒で教えます』
..... 京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授 飯吉 透 2

2013 年度新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンス開催報告◆

..... 学芸学部国際教養学科 A.C. Elliott 23
..... 学芸学部国際教養学科 Steven Herder
教職課程センター 水本 徳明

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部「臨床心理学」(三根浩先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 山本 裕樹 24

現代社会学部「国際紛争論」(烏潟優子先生)の授業を参観して
..... 教育・研究推進センター主任 朱 捷 24

薬学部「医薬品毒性学」(漆谷徹郎先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 中村 憲夫 25

表象文化学部「日本語教育入門」(丸山敬介先生)の授業を参観して
..... 教育・研究推進センター主任 若本 夏美 26

生活科学部「聖書 B」(小崎眞先生)の授業を参観して 教育・研究推進センター主任 小切間美保 27

FD 図書紹介「なぜ日本の大学生は、世界でいちばん勉強しないのか」
..... 教育・研究推進センター主任 小切間美保 29

TA 制度導入報告「LMS を授業に生かす方法」..... 教育・研究推進センター主任 若本 夏美 30

メルマガ「FD ニュース」の発行報告◆

FD 活動報告 (2013 年度) ◆

2014 年度 FD 事業の日程・概要◆

巻頭言◆

巻頭言 『FD レポート』 第7号の刊行によせて

学長 加賀 裕郎

教育の充実を目標として教育開発推進センターが設立されたのは2006年4月でした。同センターから『FD レポート』創刊号が刊行されたのが2008年3月、その後、発行母体が教育・研究推進センターに代わってからも『FD レポート』の刊行が続き、早いもので、今回で第7号を出すことができる運びとなりました。関係各位のご協力に深く感謝申し上げます。

FD、SDという語句が大学界に登場してから久しく、現在ではFDが義務化されています。しかし当初、FDはなかなか浸透しませんでした。教育よりも研究のほうが大学教員の本務だとか、個々人が教育努力をすれば十分だといった認識が強かったのではないのでしょうか。しかし現実には、とりわけ1990年代以降、国家及び産業界から大学に対する教育要求が強まり、また大学教員の中からも、大学生の学力低下を憂慮する声が強くなりました。

2006年には教育基本法が改定され、その第十七条で教育振興基本計画が定められることになり、国家の教育政策が直接に大学に押し寄せるようになりました。

こうした流れに、大学教員が無関心だったり、座視したりすることは無責任すぎるでしょう。一部の大学を除けば、現在の大学教育に求められるのは「教養教育+専門基礎教育」です。大学教員は研究者ではありますが、その前に教育者であることが基礎的条件として求められています。従来の教育方法を無反省に継続しているだけでは、いけないでしょう。

最近の大学に対する要求によく含まれている語句に、グローバリゼーションとアクティヴ・ラーニングがあります。グローバリゼーションが経済のグローバル化に引付けられて理解されていることには、やや問題を感じます。経済のグローバル化は、一切の壁のない一元的な市場における競争を意味しますが、一度文化的、社会的次元に降りると、葛藤の危険性に満ちた、壁だらけの多元性が現実ではないのでしょうか。「グローバリゼーション」の意味は、もう少し掘り下げて検討しないと、《英語教育+海外の文化+日本の文化》のように単純に理解されてしまいます。

ではアクティヴ・ラーニングはどうでしょうか。この言葉は大学教育では新語のようですが、初等中等教育では「為すことによって学ぶ (learning by doing)」という標語で、古くから知られてきたものです。この標語の出発点は「新教育 (New Education)」と呼ばれた、19世紀後半の欧米における教育運動にありました。先進国では第二次産業革命、帝国主義的な動きが加速し、旧来の座学では対応できなくなったという自覚が「新教育」を生み出しました。学校が社会から独立した制度ではなく、社会の動きと連動しなければならなくなった時代に「為すことによって学ぶ」という標語が喧伝されたのです。

あの時代から百年を経て、同様の標語が大学にも導入されつつあることに、大学の置かれている地位と役割の変化を感じる今日この頃です。

2013年度 FD 講習会◆

同志社女子大学 2013年度 FD 講習会次第

日時 2013年 9月18日 (水) 15:30~17:10
場所 知徳館 283教室

司会
教育・研究推進センター所長
山本 寿

- 1 開会の辞 加賀 裕郎 学長
- 2 テーマ 学生の目の色が変わる授業の仕方を「内緒」で教えます！
- 3 講演講師 飯吉 透 氏 (京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授)
- 4 質疑応答
- 5 閉会の辞 飯田 毅 教務部長

講演『学生の目の色が変わる授業の仕方を内緒で教えます！』

京都大学 高等教育研究開発推進センター教授 飯吉 透

(開会)

司会(山本所長) ただ今より2013年度同志社女子大学 FD 講習会を開催いたします。司会を務めさせていただく、教育・研究推進センター所長の山本です。今回のテーマは「学生の目の色が変わる授業方法を(内緒で)教えます！」です。京都大学 高等教育研究開発推進センター 教授の飯吉透(いいよし とおる)先生をお迎えしてご講演いただきます。お手元のチラシにもあります、先生のプロフィール等をご紹介します。先生は1964年生まれの49歳です。国際基督教大学・同大学院にて教育修士号を取得された後、フロリダ州立大学大学院博士課程に入学され、博士号を取得されています。



その後、カーネギー財団上級研究員・同知識メディア研究所所長、東京大学大学院情報学環客員教授、マサチューセッツ工科大学教育イノベーション・テクノロジー局シニアストラテジストなどを経て、現在は京都大学 高等教育研究開発推進センター教授としてご活躍されています。また、株式会社朝日ネットの顧問でもいらっしゃいます。世界経済フォーラム グローバル・アジェンダ評議会委員、NHK 日本賞審査委員などを歴任され、国内外でテクノロジーを利用した教育の進展に関するビジョン策定・研究開発・啓蒙活動に従事されています。主な著書等には、『Opening Up Education』(MIT Press) [共著]、『ウェブで学ぶ オープンエデュケーションと知の革命』(筑摩書房) [共著]等がございます。飯吉先生のご講演に先立ちまして、加賀裕郎(かが ひろお)学長から一言ごあいさつ申し上げます。

加賀学長 本日は京都大学の飯吉先生のお話を伺うことができ幸いです。この春、大学コンソーシアム京都の学長会議がありまして、私はそこでも飯吉先生の話をお伺いした記憶があって、大変刺激のお話だったことを思い出しました。また、京都大学高等教育研究開発推進センターの前所長の田中先生を、よく存じ上げておられて、そこで一生懸命やっていたら、大学教育学というものを田中先生を中心に立ち上げられました。しかし、大学教育学は教育学の中でおそらく一番新しいといいますが、一歩遅れているといいますが、そのような分野かと思えます。

なぜかといいますが、大学は長い間、教育機関という自己認識があまりなかったからです。それは研究機関、あるいは学問を教える機関であるという認識でやってまいりましたが、次第に時代が変わってまいりまして、大学も教育機関であると、教育が前面に出てくる時代に入りました。私の友人でも大学教育というものに問題を感じている者がいます。でも時代がそのように動いてきております。また、大学に関しまして、最近、政府あるいは経済界等が矢継ぎ早にいろいろな方針などを出しまして、大学に対していろいろ言っています。その背景には、教育基本法が改正されまして、その第16条で教育振興計画ですか、あれによって政治が教育に大変口出ししやすくなったりしています。これも功罪相半ばするものということも現実です。

そういう大きな枠の中で、私どものFD講習会もだんだん定着してきて、去年までは教授会の部屋だったのですが、今年は格上げされまして、一番大きな教室でするところまでに成長してまいったわけです。政府の動きなどは別にしまして、やはり教育、私どもは教師であるという自覚を持ったときに、ためになる講義あるいは楽しい講義をしたいということが率直な願いではないかと思えます。つい最近ですが、たまたまテレビでMITの教授が、虹が七色で出ることを数学的に説明する講義を見ました。世界的に有名な教授だそうです。私は大変参考になって刺激を受けました。今日もしかするとMITのそういう話が出てくるのだろうと思えます。

そういう華々しいことがある一方で、MITの伝統的な講義もきちんと並行してやっていて、両方とも必要であると私は思っています。そのようなところを今日は学んでいただいて、秋学期のスタートダッシュにつなげていただければと思います。しかも、今日のタイトルは「学生の目の色が変わる授業を内緒で教えます」となっています。内緒で教えますというと、当然このようなことが出てくると思いますが、そういう点で大変得がたい機会になると思えます。短い時間かと思えますが、ぜひ参考にいただければと思います。それでは先生、よろしく願いいたします。

司会（山本所長） ありがとうございます。それでは、お待たせいたしました。飯吉先生、どうぞよろしく願いいたします。

飯吉先生 今ご紹介にあずかりました京都大学の飯吉と申します。今日は教授会の後のお疲れのところを大勢集まっていたいただいて、どうもありがとうございます。加賀先生と山本先生にもご過分なご紹介をいただきまして、ありがとうございます。

「内緒で」というタイトルで、教授会でどよめきが起こったという話を伺いましたが、本当は「恥ずかしながら内緒で」と言いたかったところです。僕も京大などで研究科や学部で頼まれると出前で講演をするので、先生方が集まりにくい研究科などはFDという先生方がなかなか集まらないらしいのです。やはり教授会の後に設定されているのです。そうすると、全員いらっしゃるのですが、入っていくと非常に敵対的な雰囲気があります。また、京大の先生は全然遠慮もなく、どんどん突っ込んできますから、関東生まれの僕としては関西弁で突っ込まれてくるとたじたじなのです。今までで一番楽しかったのは医学部の先生方で、文学部でやったときはいろいろこちららも防御策を考えながらお話ししました。でも、寝られている先生がいらっしゃらなくて、6時を回って、しかも僕が少し長く、今日は定刻できちんと終わるようにしますが、時間をオーバーしてしまったにもかかわらず皆さん目をぱっちりしたので、これはまた質問

が怖いと思ったのですが、なかなか建設的でいい話がこの先生方もできています。FDや教育は大学によって、ここは女子大ということで、その女子学生の人を一つに簡単にくくれないところがありますし、大学の色やカラー、それから課題があると思いますので、いろいろ学ばせていただきながらインタラクション、ディスカッションをさせていただければと思います。

今日お手元にお配りした資料で、スライドの方があるのですが、もう一つの方は、実はこういうものがありまして、FDは京大でもなかなか難しいのですが、こういう冊子を作られていて、全学FD委員会という話です。

その中で、これもたまたまですが、教材では公開授業研究会というものをやっています、僕は1年半ぐらい前に京大へ来たので新人なのですが、そこで英語の授業をやるということでさせられたもの、また、先程加賀先生にもご紹介いただきましたが、今日もお話しするオープンエデュケーション、その授業をやっている中でその一コマを公開して、先生方のコメントなり、ポイントがよかったなどということいろいろ言っていたいただいて、またその話を少しして、そこから、これは本邦初公開といいますか、「ここは内緒で」「こっそり」というところですが、そのあたりの体験から入らせていただきたいと思います。

この講義はオープンエデュケーションの世界という授業です。英語でやっています。100人も200人も入らない割に寂しい授業でして、このような感じです。

今、ちらりと映りましたが、大体20人ぐらいです。日本人が12~13人、留学生が7~8人です。1人ずつ全部違う国から来ていて、タイやスイス、ドイツ、カナダ、アメリカ、アジア、インドネシア、中国、いろいろ混ざっています。これは京大で初めてといいますか、日本の大学で初めて、KUINEPと分類されている授業があるのです。Kyoto University International Education Programというものの一つで、一般教養ですが英語でやるものがくくられているということです。

このあたりの問題は、興味、動機、背景、人種、文化が非常に多様です。たった20人ぐらいしかいないのですが、その中でもかなり多様です。ですから、数的には扱いやすい数なのですが、非常に扱いにくいのです。しかも、英語で教える一般教養のいいところも悪いところもあって、学生に最初「何で、この授業を取りに来たの」と聞いたら、「いや、内容には全然興味がない」と言われて。そういう生徒が数人いて、「留学を将来はしたいので、英語の授業に慣れただけで来ました」などと言うのです。教育ではなくて工学部や医学部などが来ているのです。むかつとしますが、ただ、逆に、この人たちを何とか、最後はおもしろくて来ざるを得ないぐらいの感じにしてやろうという闘争心が湧いてくるので、にこにこして聞いていましたが、内心は「こういう者たちがなぜ来たのだろう」と思いました。

そういうものや「教育に興味がある」など、中には「何だかわからないから来た。シラバスをちょっと見たんだけど、何だかわからないものに興味があって来たんだ」ということで、このように背景がばらばらです。それから、英語のレベルもばらばらです。もちろん、英語圏から来ている学生もいれば、帰国子女のような日本人もいれば、1人の女の子がいて、最初の授業の後に「私は英語がダメなので、大切なことだけ日本語で繰り返してくれませんか。お願いします」と頭を下げて言いに来た学生がいたのですが、僕はにこにこ笑いながら「ダメ」と言って、なぜダメかという、「全部大事なことから繰り返したら授業が半分になってしまう」と言って、もうこの子は来ないかと思ったら、次のときも来て、結局最後まで取ってくれて、しかも最後は英語でプレゼンテーションさせたりして、立派にやっていました。「よかったな」と思ったのですが、そのように「妥協しない」ということが一つのプリンシプルとしてあります。

そういう多様な学生の中で、やる気や興味をどのように引き出すかということがやはり非常に大事です。ここの部分は一応教育を扱った授業なので、ある部分非常にやりやすいところを感じていて、つまり、教育というものはみんなの関心事であるということです。それまで受けてきた、高校からそのまま来たとして18歳、19歳……そういう学生さんたちが教育にかかわって生きてきているわけです。ですから、そのように個人個人にはばらつきもあるし、国が違えばいろいろ教育の制度も違いますが、そういう中で、教育と自分の関係や、そこに思い出や苦しさなどいろいろなものがあるわけで、そのようなものをうまく結び

つけていけば、教育に関しては当然うまくやる気を出せるのではないかというような活動をしています。

最初の授業などは、自分が今まで教育と向かい合ってきたことを全部、いい先生に会ったことや、いい授業、嫌な授業、何でもいいから、そのあたりの個人的な体験を話してくださいということからスタートしていくのです。そうすると、それで外国の学生などはかなりおもしろい話をいろいろ話してきて、自分の家族は中学以上を出た人がいなくてなど、日本人としてはおもしろい話がいろいろ聞けるわけです。学生などもそのようなところでお互いに興味を持ちます。

もう一つ、学習コミュニティです。僕の授業は、一体感というものをどれだけ学期の中で早く出せるかということをつつも勝負でやっているのですが、やはり同じような傾向の学生や、同じ学部の学生などが来ると一体感を育てやすいのですが、この授業のように余りにばらばらでは、コミュニティの一体感などはなかなか育たないです。ですから、このあたりを特に、埋もれてしまうような、英語だからと引っ込み思案になる学生をどのように育てるかです。例えばエピソードとしては、毎回授業の終わりに5分ぐらい一言感想のようなものを書いて、それをやっていらっしゃる先生も多いと思うのですが、そのときに「授業だけじゃなくて、他の学生について思ったこととか、自分について思ったこととか、何でもいいから書いて」と言って書いてもらいます。

そうしたら、最初は、日本の学生は英語がわからなかったり、「話そうとしたのだけれど、うまくできなかった」などの、割に自虐的なこと、内省的なことが多いです。それを何とかしなければいけないと思って、そうしたら、いいコメント書いてくれた留学生がいて、「僕はせっかく日本に来たのだから、日本人の学生がもっと何を考えているのかを知りたい」ということを書いたのです。それをその次の授業の最初に主に日本人の学生たちに向かって、「こんな声があるんだ。みんな聞きたくて来ているんだから、それでみんな、ちょっと英語が下手だからとか、それぐらいの理由でしゃべらないのは失礼だよ。君たちの声がまさに求められているんだから」と言ったのです。そうしたら、少しずつみんな話すようになってきました。つまり、そこで何が変わったかということ、英語のよしあしということを超えて、自分が求められているのだということがそこで引き出されたことで、何人かの、全員ではないですが、少しずつ学生の気持ちが変わって英語の授業に参加しようというようになってきたということです。

その中で、協調と競争をうまく使います。学生の間での競争、だから、何となく、英語ができないのはこの3人ぐらいだなどと思っているわけです。そうすると、そのうちの1人が羽ばたいていくと、「まずい。2人になってしまった。今日、まだ発言していないのは俺とあいつしかいない」と。そういう中でいかに、そこは競争の部分があると思うのですが、そこを少しマッサージして、気持ちをやわらかくしてあげて、ふっといけるようにしてあげるかということです。

それから、協調の部分です。例えば協調の部分で気をつけたことは、最初はグループ分けでディスカッションなどをさせます。そのときに、最初のころは、英語がべらべら——留学生で、英語圏ではなくてもそのような学生がいるのですが——とにかく前に出てくる学生、どんどんいく学生をグループリーダーにします。2通りあるのです。1人はとにかく、リーダーになったらこれでよしということで、自分の意見をがんがん1人でしゃべっている者、もう1人はインドネシアの学生で、とても優秀な学生がいて、学部の1年生や2年生なので「偉いな」と思ったのですが、あえて、静かにしてなかなか言わない日本人の学生を「どう？」と最初に指していくのです。このあたりは、まさにこういう人が先生になればいいな、というお手本のような学生です。そのような学生を早いうちに20人の中でどんどん見極めていくのです。その学生と、誰かが行くとそこに乗っていく学生など、いろいろなタイプがあります。ですから、このところをうまく見きわめて、頭の中でラベルづけをするのです。このあたりは少し職人的な技も要るわけですが、いかにもランダムに選んでいるように見せて、「じゃあ、今日は最初のグループは君、君、君、君」と言いながら、実はそのあたりの配合ぐあいを考えたりしています。しかも、だんだん慣れてくると組み合わせを変えてきて、強いリーダーシップはもう要らないということになると、例えば、あえて、留学生をリーダーにしないで、英語がまあまあ程度の学生をリーダーに指名するなどして、あとは学生に選ばせ

るのです。そういうことをしています。

それから、知識で学んだ、これは僕は大学院のゼミなども教えていますが、初年次ゼミ、学部の1年生の10人ぐらいのゼミでも教えていますが、とにかくこれはレベルに関係なく大事にしていることは、学生一人一人の達成感を感じさせること、それは、自分が知識をどれだけ学べたかということ以外の部分です。また後で話すオープンエデュケーションという概念に関わってきますが、まさに知識というものはオンラインなどで得られるのです。それが、教員が受け持つところとしては、知識を伝えることは比率として相対的にどんどん低下してくるわけですから、大事なことは、「この講義に参加したことで、学んだことは学んだのだけれども、それ以外に自分はこんなところに自信がついた」という人間的な成長です。その部分をどれだけ味わわせてやるか、これが味わえる授業には学生は来ます。それは断言できます。そのようなことに興味がない学生は来なくなるかもしれませんが、大概来るようになります。

それから、アクティブラーニングとは、今はどこでも言っていますが、受け身で学ばせられる学生からの変容、自分はどのように変わっていくかということです。一つのありようとしては、ただ聞いて学ぶのではなくて、自分でも教えられるようになるということが一つの変化だと思いますが、そういう意図もあって、学期の授業の終わりの三コマ目ぐらいにこのビデオを見せたのです。それからやはり大きく、特に最後の二つあたりが変わってきたので、2, 3分のビデオですがご覧ください。英語で申しわけないのですが、ただ、割にわかりやすいもので、しゃべりというよりはただ字が出てくるだけなので、21世紀の教育がどのようなものかというビデオです。

(ビデオ)

飯吉先生 というなかなかハイペースで、パワフルなビデオですが、これを学生に見せています。早過ぎて、僕も年を取って最近遠視になってきましたし、動体視力が落ちているので、何を言っているか、追いつけません。若い学生でもやはりさすがにこれを全部捉えられていません。出てきた言葉を僕がピックアップして書いてあります。このビデオは、21世紀の教育とは上のようなことだと言っていたようです。それから、先生はどのようにしなくてはいけないかという、イノベーターにならなくてはいけない、メンターにならなくてはいけない、企業的な何か新しいものを残していくような人でなくてはならない、モチベーションをつけてあげる人、それから啓発してあげる人や触媒になってあげる……そのようにならなくてはなりません。このあたりの話は皆さん、アクティブラーニングの話でもよく出てくるようです。

ところが、「このビデオの中で言ってなかったことがあるよね」と学生に言って、それは何かというと、「先生はどうしなくちゃいけないかということはここに書いてあるように言っていたんだけど、学生はどうしなくちゃいけないのかなということは言ってなかったよね。それをみんなで考えてみよう。どう思いますか」と言ったのです。そうしたら、これが出てきたのです。この順番に出てきたのですが、最初にティーチャーズということが出てきたのです。学生は何になるべきか、ティーチャーズと言って、初等・中等の先生になると。だから、「ここに来ている人はみんな、医学部の人もいれば、理学部の人もいれば、文学部の人もいる。そうなの」と言ったら、「いやいや、先生、違うよ。これは教えられるのと同時に、教えるような人間にならないと、これからはだめなんだよ」と言う学生がいるわけです。それから、リサーチャーとは、「これは何。大学院で研究者になるの」「いやいや、違う。自分の興味のあることを探すということでありサーチということですよ」…そういうことを自分の今まで知っていることとあわせているので、新鮮さがあるのです。「イノベーター、格好いいよね。格好いいけど、何をいまさらはイノベーターするの」と言ったら、「学びをイノベーターしたい」と。この時点で僕は完敗な感じがして、もう教えることをやめて、「じゃあ来週から、自分たちでやれよ。僕は要らなさそうだから」と言いました。残念ながら、このあたりはやはり留学生から出てくるものが多くて、京大の学生は割に静かでした。それから、エクスプローラーは新しい知識を探索するということです。

だから、学生たちも何となくこれを感じているのです。ただ、実際にそれが授業の中や講義や演習の中でこういうことが実際にはつらつとしてできるかいうと、なかなかそのようにはできないから、今ラーニングコモンズなども流行っていますが、それも一つとして、このようなことが自由にできる環境を整えなくてはいけないということになります。そういう意味で、オープンエデュケーションも環境の一つだと思っているのですが、僕はカーネギー財団というところに10年程いて、そこは教育のシンクタンクですが、MITがオープンコースウェアというものを始めたころから、その前から実はあったのですが、やはりブランド力によって、そこでオープンエデュケーションが有名になったのです。

これは2008年に出した本ですが、その時点で、かなりこれは21世紀、2001年のMITオープンコースウェアとは、MITの全学の講義を全部公開するという発表があった年で、僕はかなり勝手にまとめて、やはり権威というものと、フラット化された、みんながネットワーク上に協力しながらいろいろなことをするものが、優位性が変わった年ではないかと思います。それがたまたま21世紀の最初の年、2001年でした。非常に示唆的ですが。つまり、同時多発テロとは、アメリカの諜報機関などという非常に権威的で、しかも強力な体系があって、世界で一番というところに、たかだか、そのテロのときは、このようにあまり比較をすることもいろいろとがめられるところもあるのですが、ただ、普通のGPS、飛行機についているGPS、民間旅客機、それから携帯電話、そのような普通の民生のものを使って、そういうものを負かすといえますか、かいくぐって。だから、それは彼らにとっては勝利なのかもしれないですが、とにかくそこで優位に立つということは今まではなかなかやはり考えられなかったことです。それと同時に、インターネットというネットワークを使ってそういうオープンコースウェアと、これも逆に言えばMITは権威としてずっと君臨できたはずなのに、あえてフラット化していくような、なぜ敵に塩を送るように自分たちの講義を出していくのかということ、なぜこのようなことが起こるのだろうとみんな頭を抱えていたわけです。そのあたりがMITのある部分の狂気ですが、その狂気が教育を変えていくという話はまたこの後にします。僕の教えている学生は最初「狂気、狂気」と言うと、「この人は頭がおかしいんじゃないか」と、それはそうなのですが、ただ、授業も中盤に差しかかってくると、「先生、やっとな先生が最初のころ言っていた、よい狂気の意味がわかってきた」と言ってくれるのです。そうするとありがたいと思うのです。

その本の中で38人ぐらいの教育のオープン化ですね、オープンエデュケーションのリーダーの人たちを世界中に頼んで、教育の未来についてどう思うか、なぜ今、自分はこのオープン化ということにこれほど強烈に入れ込んでいるのかということと語ってもらったという本です。その中でこのように僕なりに、一応編者でこれをスタートしたので、枠組みを作って、テクノロジーとコンテンツとナレーションというように。これはまた後で大事になってくるのです。とりあえずテクノロジーの、例えば同志社女子大ではラーニングマネジメントシステムという、何か類したものがあると思うのですが、講義のシラバスが載ったり、授業の教材が載ったり、学生の提出物を集めたり、もっと積極的に使えば、僕などはディスカッションに使っているのです。今、文科省などが言っている、日本は授業外学習時間が少ないのでこれを増やすという、これもある部分簡単です。それはつまり、授業外に学生が授業のことについてワイワイ話せる場を作ってやって、そこにおもしろい課題といえますか、テーマを投げてやるということです。これは、先程言いました学習コミュニティをここに作っていくことにも役に立ちます。

一つこれは、先ほどの英語のクラスではなくて初年次ゼミの1年生たちの例です。このように今日のゼミの感想や、何かおもしろいものを見せて、それについてみんな感想を書けと言いますと、10人の学生ですが、その1週間のうち平均で、多いときは1人4回ぐらいその掲示版の中に書いて、いろいろみんな「ああでもない、こうでもない」、「ここはおもしろかった」「こういうところが問題ではないのか」などということ、勝手にディスカッションしているのです。僕の場合はそれを自分で介入していくときもありますが、多くはほったらかしにしておきます。あとは、大学院生のTAで僕についている学生も1人、時々入って「それ、いいね」などとあおってあげるようにすると、これだけで学生は英語の一つの授業で1、

2時間軽く使っています。僕がこれはとてもいいと、2度おいしいと思ったことは、こういうディスカッションを1週間やっていて、1週間に1コマの授業に来ますと、学生が既にやる気満々になっているのです。この延長線上でリアルな授業がそこで入って、全く最初は熱が上がったところから、特に朝の授業などでは学生のテンションを上げることはなかなか大変なのですが、そのようなところで非常にいい点があります。

オープンコースウェアはこのように出てきます。これも今、高校生にどのようにして京大のオープンコースウェアで出ている授業をおもしろく見せようかということで、なかなか講義名だけ見せていると敷居が高くて、「おもしろくなさそうだな」ということがあって、それをやっている戸田先生というオープンコースウェア担当の元締めの方がこのようなことを学生と一緒に考えて、「クエストマップ」などとゲームのようにして「京大のTWを冒険してみよう」と。そうすると、右の方に行くと、いきなり仲間がやられました。生体リズムと健康という授業が出てくるのです。上に行くと、やられたから薬をあげなければということで薬学部の臨床薬理学、その右に行くと、もう薬ではだめだから臓器移植だと医学部の臓器移植に行きます。予定調和的に、何とか助かったけれども、臓器がなかったら助かっていないということで、臓器を作ろうということでiPSだというように誘導されていくのです。かなりのこじつけですが、ただ、このようにでも無理やりいろいろな学部の学問を結びつけていくと、何となくおもしろい感じになってだまされてしまうので、不思議な感じで、結構評判がいいらしいです。ただ、これはメニューページだけなのですが、入ったらそれぞれの講義になってしまいます。ただ、このようにゲーム感覚に見せるというだけでも、これは高校生に向けて一応作ったものですが、例えば興味・関心を引くというところでは非常に効果的です。

それから、コンテンツの最後にナレッジというものがありましたが、ナレッジとは、長年センター長、前センター長で、僕はその後釜に入ったようなところで、研究室なのですが、そのようなところで、オープンナレッジというのは、カーネギー財団でやっていたことを継承しているのです。テクノロジーを使って先生たちがそれぞれの先生たちの持ち物、非常に豊かな教育経験、それはうまくいかなかったという挫折経験のようなものも含めて、それを乗り越えていたり、乗り越えられなかったり、そのようなところも含めてみんなウェブ上で互いにわかりやすい形で、しかも願わくば学科や分野を超えて。つまり教育は研究と違って、分野を超えて話せる可能性があるのです。例えば学生をアクティブにしようということは、自分が何研究科、何学部にいようと、みんな考えることです。そうすると、その部分だけを取り出してうまく共通化してあげると、この先生方はその場で、それこそ今日お集まりのように全学部の先生方は話が通じる場所があるのです。これは研究の世界ではもちろん切磋琢磨していくのは当たり前なのですが、教育の世界ではなかなかやりにくい。しかし、逆に、研究ではできない、悪い意味でたこつぼ化している部分を超えてやっていきます。これから、FDというどうしても教習所的なイメージが先に立ってしまうのですが、そのような形のFD、互いから学び合うというものがあるのではないかと思います。

やっていることは非常に単純で、自分の教育改善や、新しい授業を始めた場合はその苦勞などをポスターのような感じで1枚、ウェブ上に簡単にまとめるためのツールがあって、「こんなところはここに着眼して、簡単に100字ずつぐらいでまとめてください」というようなガイドがついているのです。それに従っていくと、このようなものができるのです。もし、そこで授業評価やいろいろデータを取ったということがあれば、そこにリンクでつけたりします。そのように簡単なものですが、カーネギー財団でこれを開発したときに、そもそも、自分の授業も興味あるかどうかわからないのに、人の授業を学ぶなどということは、せいぜいもって忍耐の限度は15分だろう。ですので、15分で何となくそのよさ、おいしさがわかる。「これは見てよかったな。何か自分の役に立つことがありそうだ」ということが15分ぐらいでわかるような感じで作ってもらいます。だから、30ページの教育レポートや教育研究レポートなどは誰も読みません。ですので、そういうものはやはりやめましょう。もちろん、専門の先生たちは喜んでお互いに読みますが、お互い教育改善しようなどという先生方は、なかなかそこまで時間もなければ意欲もありません。

お互い簡単に「早い、安い、うまい」などと言っていました、そのような形で教育を互いに学べるということは、先生方にとって非常にいい戦略なのではないかと思えます。

幸い今、これは京大だけではなくて、日本全国の先生方に、使いたいという人にはどなたでも使っているのです。「京大 MOST」とすると出てきます。もしくは、僕にメールをいただければ担当の先生につながります。作っていますので、このような、先程言いましたポスター枠をスナップショットと呼んでいるのですが、これは古いので、2,000枚以上集まっています、先生方も全国で600人ぐらい出ています。カーネギー財団でやっていたときは100カ国以上の人で、先生が3万8,000人以上でこのスナップショットを14万件以上作っていました。そういうものを今度はどのようにみんなで活用して共有して学んでいけるかというシステムを今、科研費を取ってやっているのですが、それは個人的な、個人的といっても30人ぐらいの全国の先生たちとやっている、個人的なものではないですが、大きなものを今やっています。

ただ、教育ナレッジは大事で、またそれをオープンにしてみんなで蓄積していくということは非常に大事なのですが、やはり教育の本質は、教える側として考えれば、お一人の先生の情熱と狂気というものが一番大事だろうということです。これもよくお見せするビデオですが、ご覧ください。

(ビデオ音声)

飯吉先生 アクティブラーニング流行りで、グループ学習がいいとされていますが、これは大講義室で1人で行う授業ですが全然アクティブです。ただ、学生は動きませんね。しかし、気持ちはとてもアクティブになっているのです。吸い込まれていくようにこの先生に興奮しているわけです。この先生はあおりがうまくて、「もし公式のみんなの理解が違くと、この15キロの鉄球が僕の顔面になって僕は血だらけになるんだ。そうすると、もう来週からは授業ができない」などと話がうまいのです。

このウォルター・ルーウィン先生は僕が京大に来る3年ぐらい前にMITにいましたが、そのときには引退されていて、でも、キャンパスにまだアドレスをお持ちで、会ったことがあるのです。僕は個人的な興味で「いやいや、先生すごいです。本当に感動します。どうやってこういうところに行き着いたんですか」と言ったら、僕の期待していた答えは「僕の恩師がこんな感じで」「こんな先生にどこかで出会って啓発された」というようなことだと思っていたら、「いやいや、僕はこんなことをやっている人は他には知らない。けれども、自分が大学院を出て大学教師になるという、研究者になるというときから、もう自分が教えるにはこれしかないんだ。自分はこれ以外の方法でうまく教えられないし、やる気もないんだ。そこから始めたので、最初は随分ひどかったよ」ということでした。ただ、30年以上教えられていく中で、「最後のときも毎日、授業があるときは2、3時間やっぱり練習してたよね、午前中に」と言うのです。「えー、30年間、毎日そんなことしてたんですか」「いや、そうだよ」と言うので、「何で、慣れているからいいじゃないですか」と言ったら、基本的には「イチローがバットの素振りを毎日やめるかい」という話をされて、イチローという答えは出てこなかったのですが、基本的には「それがプロだろう」という話をされて、「鈍ったらだめなんだよ」という感じです。それから「毎日違う研鑽があるんだ」と、多少過激な話を聞かされて、感動して恐れ入ったのです。こういうところで狂気が出ているわけです。

問題は、このような情熱に満ちあふれている先生、ウォルター・ルーウィン先生はもちろん



ウェブ教師として MIT の学生にしか知られていなかったのですが、これがオープンコースウェアやネット授業配信ということで、途端に世界中の何十万という人がウォルター・ルーウインのファンになってしまうということです。例えば日本でも、有名にするために NHK が必要とされたわけですが、ただ、NHK が紹介する前にサンデルはインターネットの世界では世界的に超有名だったのです。日本はやはりまだそのあたりの熱が低くて、NHK や東大が呼んでこないとなかなか有名にならないというジレンマがありますが、ただ、世界中にはこのような先生が何百人、何千人といるのです。インターネットで調べてみると、驚くような教育をしている先生がいます。アメリカンコミックのスパイダーマンやスーパーマンの動きだけで1学期間、授業を続ける物理の先生です。「このスパイダーマンの動きってあり得るわけ？」というような話です。「スーパーマンは飛んでいるけど、あれはどういう感じで飛んでいるんだろうね」ということだけで、それだけで授業を構成していく先生がいます。

それから、狂気と言えばこの人の右に出る人はいないという、カーンアカデミーというものがあるのですが、この中でカーンアカデミーというものを聞きになった先生方はどれぐらいいらっしゃいますか。ああ、いいですね。1人しかいないということで、見せがいがあるのですが、2分ぐらいのビデオを見てください。これは1人でやっているのです。

(ビデオ音声)

飯吉先生 皆さん、カーンさんをご存じなくても、途中で出てきた眼鏡をかけたおじさんはご存じだと思います。このおじさんが今世界で一番大きい財団をやっている、そこが、これが余りにもすばらしいので、億単位のお金を、数億のお金をぼんと出してしまいました。このカーンアカデミーとは何か、このカーンさんとは何者かという、何者でもないのです。何者でもないというのは言い過ぎで、若いときはシリコンバレーで投資銀行家だったのです。地頭はいい。努力家でもあって、MIT とスタンフォードでビジネスをやってこられました。何せ、頭は俗に言ういい方ですが、何も教育のトレーニングを受けているわけでもないし、特別なことは何もありません。ビデオの中で言っていたように、奥さんがスタンフォードの大学病院のお医者さんで、帰りがいつも遅いのです。アメリカは投資銀行家などは5時で終わってしまいますから、帰ってきてぶらぶらして、つまらない、何か手持ちぶさたになって、彼は奥さんとカリフォルニア州に住んでいたわけですが、ミシガン州に年の離れたいとこがいて、その子が数学できなくて困っているという話を聞いて、「じゃ、僕がただで家庭教師をやっただけよ」ということで、それでインターネットで先程のように授業を、タブレットに字を書きながら、別に素人的な、家庭教師的なことをやったら「よくわかる、よくわかる」ということで、そのいとこの女の子は「友達を呼んで来てもいい？」というので、そこでバーチャル寺子屋のように、ミシガン州で5、6人の中学生がそこで勉強し始めて、このカーン先生の授業を毎週受けるようになりました。

カーン先生もこれは楽しいといいますか、感謝されるのでうれしいわけです。この使ったものをどんどんインターネットの You Tube に残していきました。「さらにこういうことも教えられる」「自分はこういうこともできる」ということで、中毒になってやっていったら、気づいたら20分ぐらいのものが You Tube に3,000たまってしまったというのです。これは狂気と言わず何と云うのかという感じですが、しかも、教えている科目は、先程画面にいろいろな科目名が出てきたように、全部で1,000以上の科目を教えています。この人は大学院、マスターは行っても、それ以上の教育は受けていません。ましてや、学校で教えたことも大学で教えたこともない一般人です。今、この一般人に何百万人のファンが世界中に本当にいて、感謝状もそれこそビル・ゲイツから、先程のウォルター・ルーウインもいます。世界中の人に感謝されています。そうすると、学校はこれからどうなってしまうのだろう、あるいは学校の教師や予備校の先生はどうなってしまうのだろうということです。

その一つがアメリカで今、日本でも話題になっているフリップトクラスルーム、反転教育と言われるも

のがあって、これはオンラインで受けられるのであったら、教室に来てみんなで一斉に授業を聞いているよりは、家でインターネットなどがあれば見られるわけだから、むしろそれでわからなかったところ、突っかかったところ、それからもっと先に進みたいところなどを、学校に来て、学校で複数の先生がチュータリングをしてあげるような形にした方が子供たちのためにいいのではないかという発想が出てきます。ですから、これも先程の授業外学習時間を延ばすという点、そういう政策的な言い方をしてしまうとつまらないのですが、子供たちに本当に意味のある形でそういうことができるようになってきました。先生は必ずしも楽ができるということではなくて、しかし、先生も仕事にやりがいが出てきます。つまり、本当にわからない子供、本当に先に進みたい子供にフォーカスして自分の時間を使えるということです。

またこれも一つの狂気で、ノーベル賞でよく大学で聞く言い訳は「いやいや、あの人は教育を一生懸命やっているけど研究の方はね」と京大でもそのようなことを言われます。しかし、例えばこのカール・ワイマンという先生はノーベル物理学賞を取っているのですが、研究にはケチをつけようがありません。ただ、この人はノーベル物理学賞でもらったお金を全部費やして教育改善に捧げてしまったのです。何をしたかという、このようなオンラインで物理を教えるシミュレーションのものを、ノーベル物理学賞は幾らももらえるのかわかりませんが、全部使って足りないの、他にお金を持ってきて使って、何千万というお金を使っています。こういうものを世界に開放したら、このサイトですばらしいことが起きて、コモンズのようなものを作ったのです。そうしたら、世界中の先生たちがこれを翻訳したり、それから「自分の授業ではこの静電気のシミュレーションをこんなふうに使ってみたよ」という教案をどんどんアップロードして、あっという間に何千という教案が、30ぐらいのシミュレーションがあるのですが、それを巡って世界の先生たちのアイデアといますか、知能の貢献はすばらしいことになりました。まさにこれは全ての学習コミュニティの話をしてきましたが、先生たちの学習コミュニティに発展したということです。そういう感じで、オープンコンテンツはこのような情熱に支えられていろいろなものが出てきて、先程言ったオープンコースウェアは世界中に広がっているということです。

ただ、今度は全く、話として聞いていただければいいのですが、これをやるとなると誰でも頭が痛いので大変なのですが、例えばカーネギー・メロン大学で、オープンコースウェアはいいけれども、カーンアカデミーのようにきちんと教えるということが大事だという話をしたのです。しかも、大事なことは、教えて本当にわかったかどうかを確認して、学生達にきちんと達成感を与えることが大事で、いくらMITの授業のビデオが出ていたからといって、それを見ていてわかったということで学生がきちんと納得して理解できたという保証はどこにもないわけです。その保証をどうしようかということで考えられたのが、カーネギー・メロン大学のこのOCWです。カーネギー・メロン大学は1970年代から人工知能研究でハーバート・サイモンのような人たちがたくさんいて、人工知能が進んでいたのです。人工知能は今でも実際なかなか難しいのですが、そのような研究が積み重なった結果、非常に人間にとって助けになることがいろいろ考えられます。それを使って、京大の中で例えば学生にこのような問題を解かせていく中で、ただただ見ながらインタラクションして学生がいろいろ入れていくのです。そうすると、「それは合っている」「間違っている」などの、そこまではもちろんよくあることなのですが、間違い方によって今度は違った教え方をします。これを間違ったらこう、それが正しくて、次を間違えた子には違った教え方をします。そのあたりを人間の先生がいろいろ見ながら勘案して、臨機応変に対応していくようなことを機械でやります。すばらしいことは、このように学生の進路や、どこでつまづいたかということがレポートでぱっとわかります。だから、学生は自分でセルフモニターができて、セルフチェックができます。

おもしろい話は実はここからで、カーネギー・メロン大学の先生たちはこれを社会貢献だと思ってやっていて、つまり、自分のところに来るカーネギー・メロン大学の優秀な学生はこういう機械に教えられるような問題をやっていてはもうだめだし、要らないでしょう、これはどちらかということコミュニティカレッジで落ちこぼれていくような学生がアメリカで何万人もいて、そういう学生のために自分たちは社会貢献でやっているのだと威張っていたのです。ところが、そういうできない学生によっていろいろ使われて

いくことで鍛えられていって、だんだんよくなってきました。そうしたら、2、3年経ってカーネギー・メロン大学の先生たちは、随分よくなってきたな。考えてみたら、カーネギー・メロン大学でもこの基礎的な統計のクラスはあるし、実際に教えているのだ。もっと高度なことを教えているけれども、3分の2ぐらいはここでカバーしているようなことと近いのです。であれば、思い切ってこれを自分たちの学生にやらせてしまおうと、先程のフリップトクラスルームの発想がここで出てきます。

つまり先生たちは何をしたかという、例えば自分が初等統計学を100人に教えていて、これを授業の前にさせるとします。そうすると、100人分のデータが出てくるのです。だから、これは学生のセルフモニター用ではなくて、先生が100人分をざっと見るのです。そうすると、みんなできてはいるけれども、大概この3箇所ぐらいでつまづいているということがわかります。であれば、授業ではそこだけやりましょう。だから、そこがカーネギー・メロン大学の優秀な学生がわかりにくいところなのだから、そこだけやりましょう。そうすると、かなり時間が短縮できます。短縮した時間は帰っていいと言うと自分の業績率、おまえはもう要らないのではないと言われるので、今までできなかった、もっと先のことをやります。つまり、カーネギー・メロン大学のようなトップ校は、いかに他の大学に比べて先を教えるかということに命をかけています。ですから、ここで出てくるものは、落ちこぼれを救うという発想で出てきた教材が、実はもっと先端的なところに進ませてくれるような助けになったというお話です。

MITに関する話をさせていただくと、イノベティブな大学ではそれは文化の問題だ、文化とは、例えば学生にいろいろないたずらをさせて、いたずらの日のようなものがあって、その晩になると学生がゴソゴソいろいろなことをして、本部棟のビルディングのドームをスターウォーズのR2-D 2ロボットのように一晩で化粧させてしまったり、本当のパトカーをこのドームの上で一晩で夜暗いうちに上げてしまったり、学長の部屋の前で、学長先生もお気をつけになった方がいいのですが、朝来たらこのように勝手に変えられていたり、これは学長の1ドル札になっていたり、これも別の年に学長先生の部屋の入り口のところが壁になって、朝学長が来たら自分のところにドアがないということで、うろろろするところがビデオで撮られていたりします。おとがめや処罰はないのです。危ないことはだめです。人がけがをするようなことはだめですが、むしろこのようなものを奨励するといいますか、これで学生新聞や大学新聞で「今年はこんなすばらしいいたずらがありました」ということです。これはエンジニア魂のようなことです。一体、一晩でみんなが度肝を抜くようなことができるかということ、ここでやはり彼らとしては、実際に学内外で、授業内外で勉強していることが実は生きていたりするでしょうし、また、このようなところでうまくいった、いかなかったで学びのモチベーションというものを伸ばしていくということです。

京大は僕が来る前、何回か呼ばれて行ったときに、こういうものを見て感動して、折田先生像というものがあるのですが、それが毎年入試のシーズンになると変なものに化けて出てきます。何の意味もないのですが、伝統として残っていて、おもしろい大学だと思っていたら、そこに行ってしまったという、何か惹かれるものがあったのかもしれませんが、こういう遊び心のようなものはやはり大事だと思います。

遊び心で言うと、MITの先生などは、一般教養の工学デザインの一つの授業ですが、若い女性の助教授の2人でやっているのです。これがなかなかすごくて、一般教養ですが、激しくて限られた制約の時間とお金の中でいろいろなことをやろうとするのです。なぜ、僕がこれを手に入れたかという、若い女性の先生が自分でたくさんポスターを作って、学内にぺたぺた貼っていたのです。それで「何をやっているのですか」と、最初は学生かと思ったら「いや、先生です。これを教えている先生で自分は教師です」と言って、何かちらしのようなものを貼っているので、そうしたら「いや、競争が激しいので、自分のクラスのおもしろさを学生アピールしていかないと、なかなか取ってもらえない」。授業の中味、もちろん学習目標のようなものはきちんと設定されているのですが、MITの1年生はこんなところからやるのかと思うぐらい幼稚園レベルに入っていて、「この3つの乗り物のうち、共通していることは何でしょう」「この3つのユニホームの中で共通しているのは何でしょう」というようなところから入ってくるのです。ただ、のぞかせてもらったら、大変おもしろいのです。そのような幼稚園児でも入っていけるようなところ

から、一気に大学レベルのところに入っていきます。そのところのつかみ方は、やはりすごいと思いました。クラスでそういうことをいろいろとさせています。

このように先生たちは、言われなくても自分たちで創意工夫をするのですが、もう一つ、MITに入って、実際に内部に入って驚いたことは、同志社女子大さんでもされていると思いますが、MITでは学生による授業評価を十数年ずっとやっているのです。学生による授業評価、これは賛否両論ありますが、学生にその評価ができるのかという話もありますが、MITでも細かいことをいろいろ聞いていて、しかも全授業全教員分のデータを学内だけですオンラインで全部公開しているのです。つまり、一学生から学長まで、全ての教員の全ての授業のデータの学生評価を全部見ることができるのです。例えば、これは外から入れないので、僕が中にいるときにこっそり取っていたキャプチャーで、貴重なのですが、例えばコースナンバー3.96というところでやると、バイオマテリアル、生物学的な素材で作った、例えば人口義手などのようなものを教えているクラスがあって、ここ10年ぐらいのコースが出てきます。毎年違った人が教えているときもあれば、同じ人、それからコース内容も少しずつ変わってくるのです。

衝撃的だったのですが、一つの講義でもアメリカの場合はよくチームティーチングということで複数の先生が教えるのです。それで、よく見ますと、2人の先生はよかったです、1人の先生はよくないなど、そこまで細かく評価されているのです。この下のところに実は個別にも先生があって、つまり、授業全体の評価もあるけれども、本当にその中で個人の先生の評価ということをかなり厳しくされています。「こんなものを公開して、労働争議にならないのか」というような話です。それで聞いたのですが、こういう調査をやっている部署のところに「今まで教員から殴り込みというかはなかったの」と聞いたら、「いや、そんな聞いたことがない。問題にもなったことがない」という話で驚きました。MITは全部公開しているので、これはとても評判のいいクラスだということで、クリックすると、使用教材などをピットもつけて全部見られるのです。だから、もちろんそういう意味で、向上心のある先生方が、評判のいい先生はどれだろうということで行って、そこから学ぶということではできるのです。逆もまた真なりで、例えば意地の悪い生徒がいて、例えば「この先生のパフォーマンスを調べてやろう」「過去5年間にどのようなことを教えているのか」というようなことをすれば、だんだん評価が落ちているということもわかってきます。

ただそのようなことを、別に表立ってみんなやっていなくて、つまり、ある意味でこれをオープンにしてみんな自由にアクセスできるということをやっただけで、ある程度の、最低限の教育の質保証というものは終わっているのです。つまり、みんながこれを受け入れた時点で、これはこういうものだから教育はやはりしっかりやらなければいけないという自発的な気持ちは生まれてきます。そうでなくても、先ほどお見せしましたように、評価されていなくても、先生たちはあのように気が狂ったように教育に突進していくのです。その中でこういうものはごく当たり前のように受け入れられていて、結構新鮮で衝撃的でした。聞きましたら、アメリカで一流と言われる大学は、みんなこのようなことは全然驚かなくて、「うちはこんなだよ」と言われました。

これも、この大学に物理学がないことは重々承知しておるのですが、話として聞いていただきたいくて、教育とは何かということです。例えばこれは先程の僕の初等物理のクラスですが、皆さんお待ちかねのテクノロジーとアクティブラーニング、グループ学習、みんなガヤガヤワイワイやるということです。それがMITでも7、8年前に入ってきました。これは有名なピールというものです。それまでは代行技術で用いられてつまらなかった、この真ん中にある、NASAから来たジョン・ベルジャー先生という、青いシャツを着ている先生がいるのですが、ウォルター・ルーウィン先生のようにキャンパス物理がとてできるわけではないし、あのような先生はアメリカでMITでも1人ぐらいしかいません。普通は、代行技術でやる授業はやはり板書などが普通になるのですが、それは見ているだけです。そうすると、やはり学生は来ないし、寝ているといいますが、MITの学生と言えどもやはりこれはだるいです。教えている方もやる気が出ないということで、このジョン・ベルジャー先生は「NASAの研究所にいたころの方がよ

っほど楽しくて、これはひどいな。自分も何か教員として、やる気がなくなってきた」ということで、教授会で椅子を蹴って「もう教えたくない。外してくれ」と言っ、そうしたら、みんなが「まあまあ」と、辞められては困るから、「では、何か授業を変えていきますか」ということでこれが始まって、お金を集めて、1～2億かかったらしいのですが、こういう部屋も大講義室をこのように作り変えて、小さいテーブルをいろいろ、コモズ的なことと言えばそれまでですが、コンピューターのシミュレーションなど、学生はそれを見ながらでいろいろ考えて。これはビデオがあります。

(ビデオ音声)

飯吉先生 こういう感じで先生たちは教えて、それで学生は「何々だ」と言っ、それでお話しして、先生が「この質問はどう」と言っ、クリッカーというものを使っ、学生が投票して、正しい正しくないというようなもの。これはMITでも新しいということ、しかもニューヨークタイムズが、MITではこのような先進的な教育をこういうすばらしいアクティブラーニングでやっているということを記事にして、1面に出たのです。たまたまそれは僕がMITで仕事をしているとき、MITといえどもニューヨークタイムズの1面で教育がすばらしいと言われるとうれしくて、学長からメールが全学に流れて、すばらしいと取り上げられましたということ。そうしたら、アメリカの大新聞のサイトは全部、記事にディスカッションボード、掲示板がついているのです。誰でも書き込めるのです。それが最初は「いや、さすがMIT、すごいな。うちの大学でもこんなことができればいいのに」などというものがあつたのですが、そのうちに書き込みが増えてくると、とんでもない書き込みが出てきて、しかも、それがMITの学生、しかも、この授業を取っている学生が「自分は大嫌いだ」「苦痛だ」「ドロップした」などと、それからMITの卒業生が「いや、こんなのはMITの教育とはいえない。伝統破壊だ」などいろいろなことを言っ、炎上してしまつたのです。残念ながら、これはMITのサイトではないので、MITはこれをとめることができません。今でもこのページに何百も書き込みが続いているのです。行っ、見られるといいのですが、擁護派と反対派が半分ずつぐらいです。

ところが、MITがその後調べてわかつたことは、MITの学生も、半分はこれを支持して、半分は普通の授業の方が、つまりMITの先程のウォルター・ルーウィン先生のような工夫された大講義の方がおもしろい、学べるという学生と、半々に分かれたのです。しかも、こちらの新しい方をやっているグループの人たちもきちんとデータを取っ、これをやつた学生の多くは出てきます。少しいです、10%ぐらいです。だから、これは意味があるのだということ、そこでバトルになりました。結果、MITはどこで折り合いをつけたかという、例えば、この8.01というコースナンバーですが、その8.01と8.02という2種類を用意しました。同じ素材を使っていますが、中華とフランス料理のようなもので、どちらを取ってもいいというぜいたくなあれです。高い学費、年間350万や400万を払っていますから、そのぐらいのぜいたくをさせるということ。だから、アメリカのいい大学の学費は高いのです。

また別の例です。これはハーバードのエリック・マズール先生、10月にまたコンソーシアムのところの会場を使っ、今度はうちのセンターで主催して10月10日にお招きしますので、もしご興味があれば、うちのセンターのホームページに来てくれれば、誰でも申し込みできます。去年お呼びして好評だったので、また今年も、お友達なので来てもらおうということですが、実はこの先生もいわゆるクリッカーを使っ、授業をやっているのですが、実はとてもやはり狂っているのです。こんなシステムを作っているのです。こういう話を今回10月にしてもらつたのですが、クリッカーを使っ、例えば「この横の人と話してください」、「正解を選んでください」「今度はみんなできましたね。めでたし、めでたし」というようなものが普通ですが、この先生の授業は、どの学生が誰と話し、どのような選択をして、どのような正答ごとが出たということを全部記録しているのです。これは横に人がいて全部記録しているのですが、飛行機の座席表のようなもので全部記録します。そうすると、機械が全部パターンをだんだん学んでくるのです。この人と

この人が並ぶと必ず間違えた答えが出るなど。そうすると、機械が「一番前に座っているあなたは、今度は3列目の後ろのあの人と相性がいいはずだから、離れてください。ほら、正解が出たでしょう」ということをやっていきます。すごいことをやっています。これは教育の実験といえますか、「マイノリティー・リポート」というSF映画があって、予定犯罪者を捕まえるという映画で、ダークですが犯罪を99%犯すという人間をいろいろなアナリティクスを取って、データを取って調べて、犯罪を絶対に起こす前に検挙するのです。これは暗い未来ですが、これの逆教育版です。これをハーバードのマズール先生がやっているのです。未然に学習の過ちを防ぐのです。おもしろいことをやっています。

このようにいろいろなところにテクノロジーが入って、単に電子黒板のような入り方ではなくて、いろいろなところで教育進化がさせられています。その中でやはりとても大事なことは、互いに学び、それから今日お話ししたように教え合うことという、どれだけそのようなものを支援していけるのか、また、どのような人々と学生たちがどこで会えるのかです。例えば、このオープンスタディというサイトがあって、世界中の何万人という学生が集まってお互い教え合うというサイトです。このサイトに僕は実験的に、自分の初年次ゼミを取っている学生を送り込んでいます。理学部の学生で、英語ができない人のまたお決まりの言いわけで、僕は英語を、中学高校のときにずっと赤点で、一貫して40点以上取ったことがないということが自慢で、この間、大学英語教育学会というところに呼ばれて基調講演しろと言われて、そこから話が始まったら、しーんとしてなかなか愉快でした。ですので、英語ができないという言い訳はあり得ない、何とかなるのだという感じがします。

「それに行って、このグローバルな学習コミュニティに行って何か書いてこい」と言ったら、「嫌だ、嫌だ」と言ったのですが、「行かないと単位やらんから、じゃ、書いてこい」と言って送り出しました。心配になったら、次の週に戻ってきて、1時間その話を、いかにそれがすばらしかったかを話し出して、とまりません。やったことは何だったかという、大したことはないのです。一生懸命、これなどは10分かかって書いたという“please tell me How to write and attractive lesson. I found it very difficult write and English is. Please help me.”京大生がこういうものを10分かかって書いているのですから、中学生レベルではないですか。行ったら、「いやいや、でも、すごい苦労したんですよ」「まあわかった、わかった。それでどうだった」と言ったら、「いや、30秒以内に返答があったんですよ」。そうしたら、それはこの下に出ているのです。“What is the saying about and what thinking point do you want distance.”「なぜ英語で書くか」と、「三つ、なぜ英語で書きたいかという理由を書いてくれ」と、また何かいろいろ書いてきました。そうしたら、今度は別の国の知らない学生がそれにやはり自分で奔走してきて、「うわ、すごいことになってるな、これは」といって言った言葉が「リアルなつながり感が半端じゃない」「それはおまえ、バーチャルだろう」と言ったら、「いやいや、僕にとってはこっちの方がリアルだ」「ああ、そうか」ということです。

その次に言った言葉がまた衝撃的で、「Yahoo! 知恵袋とは全然違います」。覚えていらっしゃる方はいますか、僕はこれで笑ったのですが、Yahoo! 知恵袋の方がいいと、京大の入試で非常に話題になったことがあって、入試のときにカンニングしたという学生がいました。ですから、それはいいけれども、Yahoo! 知恵を出すのは京大的にはおもしろいけれども、「どこが違うの」と言ったら、「いや、Yahoo! 知恵というのは意地悪な世界で、質問をした人間がバッシングされたりするんですよ。『そんな質問』『おまえ、そんなことも知らないでよく生きてるな』とか言われるんですよ。そんなところに、怖くて書き込めません」。ところが、「このオープンスタディというのは、入ってみたら、もうみんな助け合うことしか考えていない」と言うので、「そんなもの、いじめみたいなこともないし、何とか助けてあげようという格好で、ここから世界にどこかにいて来るんだというのは、びっくりしました、僕はこういう学生が何千人も、何万人もいるということに」。名前を出してしまっていていいと言うから出していますが、ミヤザキ君というのです。最後のレポートの中でこのように言ったのです。引用させてもらおうと、「ある事柄について本当に学びたい者同士がオンラインでコミュニティを作り、議論などを交じ合わせながら積極的に学ぶと

いうのは、それまでには存在しなかった学習形態である。オープンスタディを通じて、先程のタイトルですね、「こういう学習形態を構築すれば、従来の何倍も効率よく、そして楽しく学習できることは間違いないと感じます」。これは1年生ですから、次がすごいのです。「また、これは何も学ぶ側に関してのみ言えることではなく、教える側に関しても言えることである」と。これは教員のことを言っているのだな。つまり「教員もこうやってお互いに切磋琢磨したらどうなんですか」と言って、先程うちのセンターでやってきた相互研修型FD、まさにここで大学の1年生に言われてしまっているわけです。恐れ入りましたということになります。

あと5分ぐらいで終わってディスカッションに入りたいと思いますが、イギリスのオープンユニバーシティー、今となってはこれも100カ国以上の方が5万人の学生を抱えている巨大オンライン大学です。元々は日本の放送大学と同じで、放送をベースにやっていたのですが進化が早いです。これも、自分たちのオープンユニバーシティーにお金を払ってきている学生と、そうではない学生が一緒になって学習コミュニティを作ります。また、ここにふらりと来た人がオープンユニバーシティーの学生といろいろなディスカッションをして、「だったら、うちのオープンユニバーシティーのこの授業を取ってみたら」などと学生が勧誘しているのです。そうすると「じゃ、取ってみようかな」ということで、どんどん世界中から学生が集まってきます。

これは昨日ライブでご紹介した「クローズアップ現代」といって、ここで話すのはムーブという新しい動きの話で昨日、NHK がとてもいい番組を作ってくれて、それにコメントしたのです。これは先ほどのカーンアカデミーという何者でもない1人が3,000の授業を教えます。この人に啓発されてスタンフォードの先生が発しています。自分のスタンフォードで人工知能入門というコースを大体1年で100人ぐらいのスタンフォードの学生に教えていました。これをカーンアカデミーのように一遍に何万人に教えたらどうなるのだろうという発想がここに出てきて、実行してしまいます。その結果、世界中から10万人が登録して、その中の5%程度ですが、きちんとオンラインで自動的にできるテストのようなものをやるのです。全部パスして、最後にレポートなどもある程度簡単なものを出して、そうすると、修了証というものが来るのです。修了証は、もちろん大学のお金を払って登録している学生ではないですから、単位ではありません。単位ではないけれども、この終了証を持つと、このスタンフォードで教えている人工知能入門の「あなたはスタンフォードの学生と同じレベルでこれをちゃんとクリアしました」という証明になるのです。これの意味があるかないかということです。これは後に出てきますが、昨日のNHKの番組でもそのところを強調してやってほしいということを要望したら、まさにそういうところをやってくれたのですが、非常に意味が出てきたのです。これはスタンフォードの先生が始めて、MITなども触発されて自分たちもやろうということで。それが今や、大きなところは二つです。コーセラとLXという二つのグループです。一つは企業で、片方は大学の教授会というコンソーシアムですが、そこが今や500以上の講義が、今のような修了証というものを全部トップクラスの先生たちが、マイケル・サンデルも入っていますが、教えています。

ここで実に大事なことは、オープンコースウェアは大学の宣伝だという一面があって、例えば京都大学なら京都大学の宣伝的な教育宣伝です。しかし、ここになると、個人、大学の宣伝ではなくて、例えばハーバード大学のマイケル・サンデル先生の授業を出しているわけです。しかし、もしサンデル先生がハーバードか琉球大学へ移ったらどうするのと言ったら、価値としては同じです。だから、マイケル・サンデルという人の個人の教員としてのバリューといいますか、価値がそこで評価されて、またそれが何万人という学生の世界から広がります。ですから、個人戦になってきたということです。予備校の先生などもそういう感じですね。「何とか先生」などのようなことがいろいろあって、高値で取引されています。だから、大学もそのようになってくるのではないかと思います。

ウォルター・ルーウィン先生の先程の授業、これでまた面白いことは、ウォルター・ルーウィン先生の通信授業とアクティブラーニングをやっていた授業は、先程お話ししたように別物だったのです。オンラ

インでこのMOOCというものをやるときに、これを融合して新しいハイブリッドの講義を作ったのです。これはベストなのです。こういうところで新しい進化が始まって面白いと思います。

このような修了証が出ます。これはバークレーユニバーシティーです。本人確認できれば出しています。いわば京大もコーセラというところに対して、僕がやる後ろで世界中で、今のところはトップ大学が入っています。

こういう流れが出てくると、多分、世界大学のような感じの一つになるから、この中でも教員はたくさんいるという中で、学生はそこで選んでいくという世界も一つ、妄想していくと、出てくるかもしれません。単位認定ということを超えた修了証というものを今はほぼただで、本人確認などのところでお金を若干取るところもありますが、一流校の単位に当たるものがせいぜい5千円から、高くても1万円ぐらいのものでしょう。このようなものを、アメリカの各単位認定認証機関などは例えばこのAKDEというアメリカのカウンセラー・エディケーションは2,000ぐらいの大学が加入しているのですが、こういうものの一部を単位として互換で認めていいという動きが出てきたのです。だから、それは多少、自分の大学にいる学生ですが、他の大学のMOOCを取って、それを自分の大学の単位として認めるためには、手数料を払ってやります。「手数料を払ってくれば、それを単位に互換して、うちの大学の卒業要件に入れていきます」というところが出てくるでしょう。戦国時代ですね。

いろいろな議論はあります。これがいいというわけでもないし、そのようなビデオ講義でやっていっていいのかということです。例えば、先程のウォルター・ルーウィン先生の実習のコース、演習のクラスなどはどうするのだということです。それから、マイケル・サンデルの授業をカルフォルニア州立大学サンノゼ校というところで使ったら、先生達が「そんなものは使わせるな」という労働争議が起きて、「自分たちの地元の教員の尊厳をどう考えているんだ」ということで学長に詰め寄ったという話があって、今問題になっています。ですから、いろいろな問題が絡んでいて、もちろん、先程のピールの話もそうですが、それから今日した話の中でも、教育イノベーションなどはそれほど簡単にするものではありません。やはりいろいろなドラマがあって、失敗があって、いろいろな文化的な葛藤があります。まずいのだけれども栄養がある食べ物、ニンジンの子供に無理やり食べさせると泣きます。どのようにしてそれを食べさせるか。刻んでチャーハンに入れるなどです。そのようなことまで考えていかないと、教育は進んでいきません。

このあたりは後でお読みください。最後に大事なことは、最後のビッグデータはもちろん大事なのですが、つまり、僕が日本で最近実験的にやっていることは、企業の採用する人達、特に大企業、いろいろ話をしに来るのですが、会うと「まあまあという大学を出た、学士を持っている人と、高校しか出ていないのだけれども、MOOCでプリンスとイエール、スタンフォード、ハーバード、カリフォルニア工科大学など、その辺りの七つか八つ修了証を待っている人がいたら、まずどっちが欲しいですかね」と言ったら、今まで声をかけてきた人の100%が後者です。つまり、そちらの方で、実は昨日NHKでそういうものを外国でとってくれたのですが、シリコンバレーのIT企業の人材確保の人は「スタンフォードの学生でも信用できんからね」ということを言っていたのに、日本のこの吹きかえではスタンフォードという部分が落ちていて、NHKのディレクターに後で聞いたら、「いや、訴えられると嫌だから」ということでした。アメリカの一流大学でも出た人が本当に実力があるかどうかはわからないということを、スタンフォードはたまたま、シリコンバレーなので一番近いところですから出しました。そのために、こういうMOOCなどで自分の力試しをして勝っていく学生をやはり採りたいということです。ですから、これは日本の企業などでも、日本の国内の本社で働かせるにも外国人採用ということが出てきていますが、このような流れの加速にもなります。

ほとんど最後ですが、2週間前に、LXという京大が入っているグループのところがこういう発表をしました。Googleと提携して、この先ほどのMOOCというものは今まではトップ大学ばかりがやっていたのですが、これをGoogleが「誰でも作れる、大学ももちろん作れるけれども、要するにカーンアカデミ

一のような個人、ただ教えてみたいという人も、このMOOCができるプラットフォームを無料で来年から解放します。」という宣言をしたのです。これはすごいです。つまり、カーンアカデミーが1人で何万人、何十万人という人に教えていく中で、まさにフラット化された中で、今まではフラット化された中で、世界中でいろいろな人が高等教育にアクセスできれば、そこから優秀な人がどんどん出てくるというイメージがあったのですが、これが教え手の方にも来たのです。つまり、教えたい、うまく教えよう、うまく教えられるようになったという人たちがこのフラットなところから、それこそ高校生かもしれませんが、このままでいくと、そういうところからどんどん出てくる可能性が今出てきました。これが来年度以降のもので、これはNHKでもニュースで取り上げてくれました。このGoogleが、また見出しがおかしいのですが、昨日のものも「ハーバードに行こう」などと、よくわからなかったのですが、でも、基本は今のようこのMOOCのようなことを、もう大学ですらなくて、どこか企業グループや個人でもできるようになります。

アメリカでは、これはSFのような話ですが、19の州が合同で作ったウェスタンガバナーズユニバーシティーというものが何年も前にできていて、オンラインでしっかりとできている公立大学で、履修カリキュラムを持っていない、履修カリキュラムはあるのですが、授業を提供していません。もちろん外部契約して受けられるオンラインの授業のようなグループ、授業部もあるのですが、別にそれは使わなくてもいいのです。例えば今のようなオープンコースウェアやMOOCなどというもので自由に学んでくださいと。

では、大学として何をやるかということ、認定だけです。きちんと履修、講義、コース、単位に見合った能力・技能を持っているかどうかだけをテスト、これは放送大学院のようにきちんと対面で認証していきます。これで、学位に絡むコストは普通の私立大学の6分の1ですから、アメリカの私立大学は高いので、日本で言うと40万から50万ぐらいになるでしょうか。しかも、その学士課程は最短2年間で修了できます。実際にそういう頑張る学生も出てきます。いくらでもできるわけです。要するに、認定試験だけを受けられれば卒業資格がもらえます。素晴らしいことは学生のために24時間、1週間7日、オンラインや電話、スカイプなどいろいろなもので、つまずいたときに何かを使って学んだりして、昨日のNHKの番組でもそのようなシーンがありました。誰かが助けてくれるようになっていきます。そういう人を世界中のリーダーのポストや大学院生を雇って、チューターのようなものです。

2年ぐらい前にアメリカのベストセラーになったもので、『ドゥ・イット・ユアセルフ・ユニバーシティー』という本があります。「大学というものは学生が自分たちでレゴブロックのように作っていけばいいのではないか」という過激な本です。これはビジネス誌の有名な、若い、名うての記者が書いた本です。日本はどうでしょうか。学長に聞かなくてもわかるだろうという話ですが、具体的に明らかに過当競争になっていて、その中で、これはうちの1年生の学生が今年行ったのですが、日本の大学というものは、何となく見ていると、私はこの間水族館に行ったときにイワシの大群がいて、そうすると、イワシの大群は水族館の水槽の中に入ってしまうと元気がなくなって、天敵がないので、みんなゆるゆるとなってしまうと、そうするとお客さんが喜ばないから、逆転の発想で、水族館の人はあえて天敵のマグロをそこに放ちます。何匹か食われてしましますが、途端に元気がよくなって、勢いがよくなってぴんぴん動くということで、水族館で実際に見てきましたが、その海遊館で録ってきたのです。だから、オープンエデュケーションとはまさにこのようなマグロの存在で、こういう話があって、食べられた後、イワシの缶詰になってという、笑い話にははいけないのですが。最近、僕は高等教育未来学といういいかげんな学問を「やっています」などと言うと、高等の学者の先生からは嫌な顔をされますが、そんなことを考えている人も必要ではないかと思つて。アメリカなどではそのような人もトップにいるのです。

その中で、僕の考えだけではなくて、アメリカでもこういう妄想力のある人たちによって言われている、実際には実現されているところも既にあります。高等教育はもう学位ということではありません。今日のMOOC話では単位ということでもありません。それから、大学教育の職業はこれから恐らく変わって

るだろうと思います。教える人が教員で、学ぶ人が学生という役割も、それほどきれいに分けられなくなります。そこもお読みください。

加賀先生がご専門ということで、大変恐れ多いのですが、最後にこのジョン・デューイの引用を。哲学者で教育指導家のジョン・デューイさんが100年前にこのようなことを言っています。まだコンピューターもインターネットも何もない時代です。世界もこのようにグローバル化されていないし、めまぐるしくなかった時代に、“If teach today after me for yesterday. We global children learn.”「昨日と同じように今日も教えていたら、それは子供たちの未来を奪うことになる」ということをおっしゃっていました。今や、皆さんご存じのように、教えることから学びへのシフトということが新たに展開されてきました。その中で僕が勝手にジョン・デューイ先生のlearnのところの言葉を勝手に変えてしまっているのですが、「もし昨日と同じようにわれわれが学んでいたら、われわれの未来を作ることはできない」ということです。

すみません。時間を少しオーバーしてしまいましたが、どなたも寝ずに起きていてくださって、どうもありがとうございました。



司会（山本所長） 飯吉先生、どうもありがとうございました。それでは、飯吉先生に質問等がございましたら、挙手をお願いいたします。では、飯田先生、どうぞ。

飯田先生 国際教養学科の飯田と申します。本日はどうもありがとうございました。せっかくの機会ですから、今日はオープンエデュケーションの話ですので、私はあえて陰の部分を開いて本音で聞きたいと思います。

私は現在教務部長をしています。そのため毎年、学生会から「授業中、私語が多い」ということが出てきます。学生会では私語撲滅キャンペーンなどを行っています。そういうところはいかにも女子大だな、と思うのです。しかしながら私語の問題は依然として治らないわけです。これにはいろいろな理由があって、簡単には解決できないと思っています。私はこういう立場になって、この問題に対してきちんと答えなくてはいけないと思っています。いろいろな考えがあると思うのですが、短く一言で、どうしたらいいか、その解決策を教えてください。

飯吉先生 京大でイノオ先生という人がいて、すばらしいシステムを開発していて、悪夢のシステムで、天井に何十台というカメラとマイクが生徒たちの教室にあって、寝ている学生、私語をしている学生にばあっとマイクなどがズームで入って全部記録を取っていて、SF映画の悪夢のような教室が実験的にありました。例えば、全教室にそれを入れれば、それを自動的に集計して、単位をあげるかどうかになれば、技術的には解決されやすいと思うのですが、僕は実は京大の文学部の先生向けの講習会のときにそこで話をしました。文学部の先生には「いや、先生のところはイノベーションで楽しくやれていいけれども、われわれは変わらないところに価値を求めている教員です。つまり、16世紀のトルコやイスラム、それは別に、マルチメディアを使うものとは違って、このような価値があるなどというものを伝えていくのが我々の義務ですから、変わる必要はないんじゃないですか」と。当然想定外の問題です。そうしたら、その2人、京大の文学部は手ごわいのです。そこで僕が言ったのは「いやいや、それはごもっともな話です。先

生が例えば今奈良の老舗の和菓子屋さん、やっぱり300年続いた伝統のこのお菓子は売っていきたい。だけど、デパートでは売れません。あちこち流通の販路を広げても売れない。どうするかというと、子供だましのようものを片方で売りつつ、それを売らなくちゃいけない。だけど、皆さんそれをやりたくないでしょう。何が言いたいかというと、教えたものの価値や思いは変わってなくても、学生が変わっているし、学生を取り巻いている環境が変わっています。つまり、私語がなぜ多いかというと、私語の方が楽しいからです。私語のベースが何になっているかというと、みんな携帯電話をやっています。では、私語をしないからいいかというと、みんなインターネットを使って静かに水面下で私語をしています。だから、私語がなくなったからといって安心できないのです。水面下で私語をしているかもしれません。

結局、答えは一つしかなくて、それに勝つしかありません。だから、もちろん、「私語をしている人は出ていい」と言うことは排除なので、これはオープン的にはいいのですが、「出ていってください。他の人の邪魔になるから」ということです。もう一つは人しかなくて、「私語よりも面白く」ということしかありません。ですから、携帯に勝つ、スマホに勝つ、ということ。言葉に勝つにはどうしていかかです。もう一つ言えば、先程先生がおっしゃった、単位を落としたり話ではないですが、私語厳禁という形で、「私語3回レッドカードをもらった者は、そこで単位なし」などと。それは簡単です。ただ僕としては、自分の苦勞として、そんなものにも負けずにおもしろくみんなを興奮させる努力、それはウォルター・ルーウィン先生がまさに1日3時間練習を欠かさないと、失敗したらそれは盛り上がるかもしれないけれども、学生を感動させるためには自分としてはこの方法しかないと思うのです。いろいろしたりするといいいのです。その努力をしないで、私語だけをなくそうということはやはりよくない。

飯田先生 ありがとうございます。

司会（山本所長） 他にありますか。西村先生。

西村先生 食物栄養科学科の西村です。先生のお話の中で、イワシが天敵のマグロがいると非常に生き生きと団体行動をしたとありますが、これは海遊館ではうまくいったのですが、真似をした水族館は水槽が小さかったのか全部マグロに食べられて、イワシがいなくなったのです。このことは、大学の規模に合ったFDのやり方があるという事だと思います。また、先生のお話で他大学のネットで提供されている講義で単位が取れるというのがありました。私などは怠け者ですから、そうしたら私よりいい人がやっている講義を学生に受けさせて、それでクリアしていただくと、自分をもっと研究できるかと単純に考えてしまうのですが、そういう方向には向かわないのですか。

飯吉先生 向かうと思いますが、逆に言うと、研究の世界が大変熾烈になってきて、研究だけの専任教員として、つまりMITなどではシニアレクチャーなどという教育専任の先生たちがいまして、こういう人たちはテニュアトラックを持っていません。テニュアトラックとは終身在職権。研究だけをしている先生たちもいます。ただ、もちろんそれはノーベル賞クラスのような人たちは教えなくてもいいです。だから、分業化が進むということです。ただ、分業化が進むということは、その道で極めなくてはいけないということが生き残りの条件になっているので、言葉は悪いですが、僕もまああの研究をして、まああの仕事をしているということで割に生きていける世界。それはできません。もっとわかりやすい失礼な例を使うと、タクシーの運転手さんは、GPSというテクノロジーが入ってきたことで大分楽な職業になりました。昔は、30年間このあたりを乗り回していて裏道を知っているなど、この時間はここが混んでいるなど、全てを知っていて、暗黙知になっています。それが今はみんなの道が混んでいるからここに行きなさいとぱっと出ます。それに従って、ある意味でロボットのように運転しています。

これをどうするのかというと、今いろいろな自動車会社が研究しているように、自動で安全に運転がで

きる、もしかすると人間よりも安全に運転できるかもしれません。飛行機や新幹線はそのようになっていきます。そうなってくると、タクシーの運転手さんも多分もうなくなるのではないかと、例えばイメージです。では、これは教員にとってはどうかです。つまり、今のようにならぬ出てきたり、それから、学生同士が学び合うためにいろいろなサポートやツールや教材が使えるようになってきた場合に、だから、これはGPSのような話ではないかと思うのです。そうすると、先生は、その中で生き残っていくタクシーの運転手さんは何かと考えると、そういうサービスが出ていましたが、観光する運転手さんなどです。機械ではできませんから。お客さんと話をしながら、「この3人のお年寄りの喜びそうなところを、1日かけて回ってあげる」、例えばそのようなサービスが、機械ではなかなかできません。そのような仕事になっていくのではないかと思います。

そういうことを考えると、こういう機械化が進む、オープン化が進む、それから、そういう使えるものがどんどんいいものを使って変化が進んでいくと、最後のスライドにあったように、教員の役割が変わってくるということは、まさにそういうことを意味しているのですが、残念ながら、これは絶対起こってきます。皆さんはそれぞれお年も違ってきます。僕も今49歳ですが、退任するまでにどこまで進むのかということがありますが、間違いなくそのような方向に進んでいきます。これは大学の利権や価値などの議論の前に、社会の全体が今、そういう方向に進みつつあって、もちろんそれにかえて、例えば100均ショップだけになったらどうするのだという議論があります。全部イオンだけのお買い物というものは楽しいのか。楽しくないと思います。そういう大事な議論はもちろんあるのですが、ただ、世の趨勢として、やはり効率や経済、それから、それぞれの人がそれなりに裕福になれる、あるいは満足できるというレベルを追求していくと、どうしてもそのような方向に行かざるを得ないところがあるかもしれません。それにあらがうことはとても大変だし、あらがっていて楽しいのかどうかということになるから、むしろそういうものに乗って自分たちが楽しんで、より豊かになるようなことを考えた方が、僕は楽をしたい、楽しくありたい方なので、そう考えます。

ですから、そういうことを少しでもお考えになって、だから、そのように僕はオープンエデュケーションというものは10年来になりますが、いよいよこういうものが実現されて、実際行動に移っていく、変化に実際結びついていく時期に入ったのではないかということです。10年前にこのような話をしてもみんな「おとぎ話みたいな話ですね。いいですね、アメリカという国はフィランソロピーというようなことだけで動いて、みんな理念だけでこうやっていいですよ。便宜的なことだけで動いて」ということになったのですが、途端に今、この原理や理念や理想がこのような形で実際にわれわれの生活にある意味で教員など、大学などもそう、生活や授業のやり方、授業ではない、ビジネスのやり方を圧迫するようなことが無理やり変えていくような力になっているのです。ですから、それを苦しむか、楽しむということ、これを変化させて追い風にするのか、それとも逆風にするのかということはそのそれぞれの立場で変わるかもしれません。これは要するに、僕はわざとどちらでも必ず起こると思っているので、早くそういう兆候といますか、どのようにしていくかということを考えていくことが今やるべきことです。今少し深刻な感じになりましたが、楽しい話のようですね。

司会（山本所長） 大変刺激的な話なので、まだまだディスカッションを続けたいのですが、この後、委員会等がたくさんありますので、そろそろ終わりたいと思います。それでは、閉会にあたりまして飯田教務部長から一言お礼のご挨拶を申し上げます。

飯田教務部長 本日はお忙しい中、我々のFD講習会に来ていただきまして、本当にありがとうございました。講演の中で、先生の高校時代の英語は赤点だということがありました。そういう飯吉先生がアメリカに行って、そして好きな本をたくさん読んで、コンピューターに触れて、十分な語学力を身につけたということはとてもすばらしい事だと思いました。このことを本学の学生にも話してあげたいと思いまし

た。今日の先生の話は一言で言えば、オープンエディケーションでした。また、議論もオープンでした。私も今日は内緒ではなくて本音で、オープンにお話ししました。先生からもまともなオープンな答えが返ってきました。そのような意味で非常に有意義な研修会だったと思います。まだまだ本学の教育にはいろいろな課題があります。しかし、これを機会に本学の教育を少しでもよくしようという試みが学部・学科の枠をこえて生まれれば良いと思います。本日はどうもありがとうございました。

司会（山本所長） ありがとうございました。これで2013年のFD 講習会を閉会いたします。それでは、最後にもう一度、大変おもしろいご講演をいただいた飯吉先生に大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。アンケートはお帰りの際、回収箱にお入れ願います。

（事務局より）

※上記FD 講習会講演関係資料のご希望がございましたら、教育・研究推進センターまでご連絡ください。

2013年度新任教員入社前オリエンテーションFDガイダンス開催報告◆

2013年度新任教員入社前オリエンテーションが2013年3月21日（木）に京田辺キャンパス知徳館261会議室において開催されました。毎年開催されるこのオリエンテーションでは、当センターも同志社女子大学の研究支援体制、研究論理、FDガイダンスについて説明を行っています。（本冊子に掲載可とされた教員のみ掲載）

学芸学部 国際教養学科 A.C. Elliott

In the FD orientation, a range of topics related to faculty development were covered at a fast (but no less suitable) speed. These topics included: how to apply for and appropriately use research funding; the possibilities for learning from peers, including open-class sessions; and the various training sessions and lectures supported by the FD centre. It was an informative and enjoyable orientation.

学芸学部 国際教養学科 Steven Herder

I was very happy to hear of the many activities underway at Doshisha Women's College of Liberal Arts focusing on Faculty Development (FD). I have a great personal commitment to ongoing professional development and I hope that I can become more involved in FD at DWCLA or contribute to your efforts in some way.

I very much appreciated the energy and pace of the FD presentation, as well as the level of depth in explaining so many things to us.

Good luck with all of your endeavors and I hope we can interact again soon.

教職課程センター 水本 徳明

加賀学長と中村宗教部長から学校法人同志社および同志社女子大学の建学の経緯と理念、とりわけキリスト教精神について説明を受けた。キリスト教精神およびキリスト教主義教育の根底にあるのは狭い意味での宗派的価値観ではなく、より普遍的な価値を見出し、私的な利害を超えてその実現に取り組む姿勢と行動力であると理解した。再帰性の高い社会においてはそのような普遍性を求める運動自体の普遍性が問われることになるので、それを生き抜く力が要請されると感じた。河野教務部長からは、DWCLA10の意義と活用および授業運営の仕組みについて説明を受けた。DWCLA10は科目横断的に形成される能力であり、各科目の内容を活用し、社会に貢献するための基盤となる力であると理解した。こうした能力は科目の内容ではなく、授業プロセスを通じて形成される面が大きい。大学における授業方法が問われる所以である。山本教育・研究推進センター所長および斎藤総務部長からは本学の研究支援や研究倫理、組織運営の仕組みについて説明を受けた。いずれの場面においても、適正なルールに則った行動が重要である。適正なルール自体が社会変化に応じて変更され続けるが、それもまたより普遍的な価値を追求する運動によるものと理解することもできる。普遍性の追求というテーマで一貫したガイダンスであったといえる。

本学 FD 推進事業について◆

学芸学部「臨床心理学」（三根浩先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 山本 裕樹

学芸学部のオープンクラス・三根浩先生の「臨床心理学」を見学しました。この授業では「不安障害とストレス」を開講のテーマとし、人間の「こころ」についての正常と異常の概念やその健康を脅かす諸問題が具体的に取りあげられています。そのうち今回見学したのは第11週目にあたる「強迫障害」に関する授業でした（2013年12月13日（金）IV講時）。

おおむね100名以上が収容できる比較的大きな教室で行われた授業でしたが、画像や動画を投影するための大型スクリーンやワイヤレスピンマイクなど数々のIT機器が巧みに使用され、投影される映像や文字の大きさあるいはピンマイクの音量などが至極適切で、実際に教室の最後列にあっても先生の授業をあたかもひとり目の前で受けているかのような印象の、ごく自然でのめり込みやすい環境づくりがなされていました。まずはその繊細なご準備に大きな刺激を受けました。

チャイムとともに始まった授業はテンポ麗しく進められます。学生の手にはあらかじめこれから投影される資料がプリントとして配布され、そこには次週に用いる予告資料の一部も載せられています。今回の授業で三根先生はテーマである強迫障害についてまずは理論的にそしてその実際を体感できるよう解説されたと感じました。理論的な解説ではご自身による口頭説明と平行して一般的な公共放送によるテレビ番組の一部を投影され柔らかく、また体感部分ではヒッチコック監督による有名な映画《PSYCHO》の一部やシェイクスピアの戯曲《MACBETH》の一部などを活用され鮮烈かつきわめて具体的なながらも、一般に思春期にある学生との一定の距離に配慮されつつ詳細に説明されていたそのご姿勢に感銘を受けました。三根先生はそれに加え、ご自身による解説の端々にこれまでの学びの復習をリズムカルに挟まれます。そうした内容と今回のテーマとの関連もきわめてわかりやすく、見学が今回のみでありながらも不安障害の概要について、一定の理解とともにさらなる興味をそそられる授業でした。

現代社会学部「国際紛争論」（鳥潟優子先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 朱 捷

2年前、大学院入試面接のときのこと。将来アフリカで国際貢献活動に従事したい、と生き生きとした表情で、安定した就職内定をけてまでして大学院進学したい抱負や夢を熱く語る、一見とてもきゃしゃな受験生に、ぼくは内心少なからず感動した。アフリカで活躍するには気力もさることながら体力も必要ですよ、大丈夫ですか、と思わず親身になって聞いてしまった。そして、そもそも何がきっかけでそのような決断に至ったのかを尋ねた。

「鳥潟先生の授業を受けて目が開かれました」

明朗な答えがとても新鮮に響いた。

この新鮮な響きにいざなわれて、鳥潟先生の授業を覗いてみたいとひそかに思っていた。オープンクラス当日はじかに教室にうかがえず、生の臨場感を味わえなかったのは至極残念に思う。後日録画で拝見した感想を述べさせてもらう。

当日授業参観された諸井先生のおっしゃるとおり、『「資料配布→口頭による説明→板書による補足」を軸としたこの授業はある意味斬新であった』。ビジュアル・テクニクを駆使したパフォーマンスもなければ、流行りのアクティブ・ラーニングの賑やかさも無い、古典的な静謐さがここにあった。この古典的な静謐さがアフリカへの情熱を掻き立てたと思うと、教育スタイルの多様性があらためて考えさせられる。酒でいえば原酒の純な味を好む人もいれば、さまざまな割方を楽しむ人もいる。時代は消費者が自らの手でおいおいの割方を創意工夫するアクティブ・ラーニングに傾いているが、原酒の古典的な嗜み方も忘れてはならない。そんなことに気づかされた鳥潟先生の授業だった。



薬学部「医薬品毒性学」（漆谷徹郎先生）の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 中村 憲夫

今回、漆谷徹郎先生の「医薬品毒性学」の授業を参観させていただきました。本科目は3年次の必修科目で、4年次春学期に開講される「医療安全性学」と併せて通年科目的な位置付けにあるようです。薬学部は薬学コアカリキュラムや薬剤師国家試験に対応する内容を優先してこなす必要があるため、「医薬品毒性学」を含め多くの薬学専門科目は必修科目となっています。今回は「裁判化学、肝毒性」がテーマで、講義が始まる時にA4 4ページ分のプリントが配られました。テーマが裁判に関するもので真実がはっきりしていないことから教科書には書けないような内容をプリントにしたとのことでした。講義はパワーポイントを使用して行われました。2つの保険金殺人事件について実際の裁判に対して科学的見地から真実を追求する内容を講義されました。ゆっくりとかつはっきりと話されており非常に分かりやすいと思いました。講義の理解度を把握するために毎回最後に小テストをされているようです。今回は残りの時間が短かったため、宿題という形で配布のみとなりましたが、通常は出席確認も兼ねてクリッカーを用いて行われているようです。



前にも述べましたが、薬学部では学生の興味の有無に関係なくコアカリキュラムや国家試験に対応することが優先されるので、いかに学生に興味を持たせるかが大きな課題となっております。私自身、漆谷先生の講義は全体を通して非常に興味を引くすばらしいものと感じました。ただ学生の方をしてみると必修

科目であるにもかかわらず、出席率がやや低いように思えました。出席している学生も静かに聴講していましたが、中には携帯電話を触っていたり、ほかの科目のプリントを見ている者もいました。また、教科書を持参していない学生も多く見られました。授業に対する真剣性の低さや危機感の薄さを感じられたのが残念です。

今回初めて他の教員の授業を客観的な立場から参観することができました。普段、私が行っている授業と比較することで今後の授業の仕方について大いに参考になったと思われま

表象文化学部「日本語教育入門」(丸山敬介先生)の 授業に参加して

教育・研究センター主任 若本 夏美

日本語教育については論文は読んだことがあったものの日本語をどう教えるか、いわば英語科教育法の対となる日本語教育法の授業を見学したのは初めてであった。今回丸山先生の授業を参観させていただき、第二言語教育を専門とする者として、まさに目から鱗、の連続だった。第二言語教育のフィールドではすでに文法訳読法(GTM)は旧石器時代のものとなり、Communicative Language Teaching (CLT)が主流となっている(GTMは日本の中高등학교ではまだしぶとく生き延びている。また広い意味の文法訳読方法、すなわち先生が発展可能性のない内容について話し、学生が書き留めるというパターンはパワーポイントの普及により大学では真っ盛りである)。丸山先生の授業はまさにその王道の日本語の教え方を紹介する授業であった。そしてCLTはコミュニケーション志向の教え方にも如実に表れていた。約20名の1年次生の受講生が4つのグループに分けられた教室を丸山先生は縦横無尽に歩き回る。ペア、グループ活動が90分の授業の中に繰り返しおこなわれる。学生と同じ目線に立ってアドバイスを



をする。そして学生同士、先生と学生の間に豊かなインターアクションが沸き起こる。月並みな授業分析をすると、受講生は理論と具体的な応用の方法(教え方)という実践セットをひとつの授業のなかで相互に関連する形で有機的に教えられていて、この続きの授業群を受講することによってオーストラリアや台湾で活躍する優秀な日本語教師がこの中から何人もでてくるだろうな、と思う程だった。英語の教科教育法では理論と模擬授業を分けてしまっているので丸山先生の授業のように1コマの時間の中に理論とその活用用法と一緒に組み込む方法はすぐにでも真似してみたい素晴らしいアイデアだった。もちろん日本語のネイティブなので応用するだけの言語運用能力が既に身につけている事は大きな相違だ。ただし、話せるから日本語を教えられるわけではない。日本語が「話せること」と「教える能力」の間には深い谷が広がっていて、そこに丁寧に橋を架けてあげないと一人前の日本語教師は出来上がらない。日本語また日本語を教えること自体についてのメタトーク・メタシンキングが、この授業では「説明→試してみる→戸惑う→先生のアドバイス→考える→再度試す→先生のまとめ」というスパイラルによって巧みにできる仕組みになっている。たとえば授業では「新しい」の活用法(「新しい」→「新しかった

ですか」→「いいえ、新しくなかったです」)が丁寧にラミネートされた分かりやすい絵を用いてどう教えるか指導されていたが、「動詞の五段活用」などのいわば意識の俎上に上がった断片的な日本語についてのメタ認知が、外国人に日本語を教えるという想定の上にこの授業で構築されていくプロセスは凄いと思った。

しかし、巧みな授業方法や理論と実践の融合の仕方以上に感銘を受けたのは、実は先生自身が強調しておられた「談話」(ディスコース、discourse)という概念であった。ジョークを交えながら丸山先生は次のように説明された:「談話」としてコメントとか寮の談話室というようにおしゃべりという意味が一般的だけれど、日本語教育で最も大切なのは「話の流れ」という意味での談話です。実は日本語をコミュニケーションに教える場合だけでなく「話がどのようにつながり、発展し、そしてひとつの物語をどう形成するか」という授業ディスコースこそが、大学FDの肝なのではないだろうか。ディスコースのある授業にはちょうど落語を聞くかのように受講生はのめり込み、笑い、そして真剣に考え込む。パワーポイントで要点を説明して学生がそれを書き写して覚えて資格試験に合格するだけ、という授業とは真剣そうな姿は似ているが学問的豊かさにおいて非なるものだ。もちろん、興味深い談話を形成するためのスキルや教材準備があってこそこの話であるが。

この2年間、教育研究センター主任としてFDについていろいろな議論に参加させて頂いたが、何か丸山先生の授業でその結論を得たような気持ちになった。ディスコースのある授業、そうだ!これからは「最高学府としての授業ディスコース」を意識した授業構築を考えることこそが必要なのだ、そんなことを先生の先進的な授業を参観させて頂きながら考えることができた。多くのヒントを与えて頂いた素晴らしい機会となった。

生活科学部「聖書B」(小崎眞先生)の授業を参観して

教育・研究推進センター主任 小切間 美保

【授業内容について】

生活科学部人間生活学科小崎眞先生の「聖書B」を参観させていただいた。内容は、クリスマスが近いことから、イエスの誕生にまつわる箇所を取り上げておられた。時代背景や人々の価値観について丁寧に説明し、学生が現代との相違を理解しやすいよう配付資料で工夫されていた。小崎先生のご研究に裏打ちされた大変深みのある授業で、とても興味深く拝聴した。授業終了後に、私自身が先生にいくつもの質問をしてしまうほど聞き入ってしまった。

【授業展開の技術について】

授業は、先生の『語り』と表現したくなるような話を、配付資料を用いて展開されていた。前の説明に戻る場面も何度かあったが、配付資料を教材提示装置で示し、どの部分を説明しているのかわかるように工夫されていた。特に参考になった手法は、プリントに授業で登場した



人物の気持ちになってコメントや質問を書き、それに隣の友達が返答する、というものだった。本講義では知識の習得以上に「心の学び」も重要なテーマだと思うので、このような方法によって友人の考えや感覚を知り、学びを深めることは効果的であると感じた。頻繁に行っているらしく、学生は短時間でこなし、「本時の振り返り」と位置づけられていた。これらのプリントは回収され、次回に先生がいくつかを紹介する仕組みになっていた。そのことが、学生の取り組む意欲に繋がっていると感じた。

【学生の様子について】

1 講時目ということで、遅れて教室に来る学生も何人かいたが、授業を中断することなく、配付資料を取っていきよう促しておられた。授業中は私語もなく先生の話聞き、プリントで振り返りをする時は、隣の友人と楽しそうに会話をしていた。後方に眠そうにしている学生がおり、残念に思った。私は、この授業が学生にとって長く心に残る科目になると推測したが、まだ、そのことが理解できないのだろう。もったいないことである。ただ、私自身も決して真面目な学生ではなかったが、授業の中で所々耳に残った事柄が、数十年たっても忘れられず、色々な場面で支えになっている。この授業の内容は、そのような可能性があると思われた。今はわからなくても、学生がいつかその価値を理解すると信じている。

FD 図書紹介

『なぜ日本の大学生は、世界でいちばん勉強しないのか？』

東洋経済新報社 2013年

教育・研究推進センター主任 小切間 美保

Teaching から Learning へ。本学でも大学の授業のあり方を根幹から見直す動きが始まっている。学生が主体的に学ぶ。そのために、予習・復習を促す「仕掛け」を仕込んだ授業を行う必要に迫られている。本書は、「日本の学生がなぜ勉強しないのか」、その原因を分析し、解決の糸口を示唆している。大学教員に理解して欲しい事柄にも言及しており、うなずける内容であった。

著者は、大学卒業後(株)リクルートに入社し全国採用責任者として活躍後起業。現在は NPO 法人「大学教育と就職活動のねじれを直し、大学生の就業力を向上させる会」を設立。日本の大学生が就職活動で海外の学生に負けていることに危機感を持ち、大学生、大学、企業に働きかける活動をされている。

日本の現状は、大学生の勉強不足が原因と述べている。ただし、それは学生の問題だけではなく、学生と大学と企業による構造的な問題であると指摘している。大学生は、「大学の授業はおもしろくないから」「勉強しなくても単位がもらえる」「授業より課外活動に励んだ方が就活に有利」などの理由で勉強をしない。大学教員は、「学生が授業を真面目に聞かない」「厳しくすると学生がついてこない」「教育は要領よくやって、研究した方がよい」。企業は「大学の成績評価は信用できないため、エントリーシートや面接で優秀な人材を確保しなければならない」と考え、説明会等の回数が増えてしまう。その結果、学生はさらに授業をおろそかにし、就活に邁進していき、ますます大学の授業が成立しにくくなっていく…。というように負のスパイラルに陥っていると解説している。

著者が企業側にいたためか、企業側の言い分に対して部分的に首をかしげる箇所もあるが、概ね納得できる分析であると思った。解決の糸口は、三者が状況を認識すること。大学教員は「考えさせる授業」「予習・復習が必要な授業」を行い、学生の知的能力を鍛えること、そして「適正な評価」を行い指導することで学生を成長させる必要があると述べている。「学生」のあるべき姿であり、本学が取り組もうとしていることと一致していると感じた。時代に振り回されるのではなく、大学本来の役割をしっかりと果たしていくことが、本学学生のためであり、本学の将来のためになると理解できた。

TA 制度導入報告

LMS を授業に生かす方法

英語英文学科 若本 夏美

昨年に引き続き150名近い受講生を対象に Moodle で LMS (Learning Management System) を活用した (「外国語教育論Ⅱ」、秋学期)。今学期は Moodle に投稿された課題を事前にスレッドに分けて議論を進めてみた (図参照)。授業で話題になったトピックや予習すべき重要事項について「投稿するスレッドを選ぶ→それまでに投稿されたものを読む→返信の形で自分の意見を投稿する→TA が議論整理→授業

で紹介」という形で進めたが、授業外学習と授業がうまくかみ合ったようにみえた。また LMS がうまく機能するよう TA が献身的にサポートをしてくれたおかげで、授業がグンとアクティブになった。今後はマイケル・サンデル教授の授業のように LMS の管理 TA と授業内サポート TA の二人体制にできると一層充実した授業になるだろうと思う。

ディスカッション	ディスカッションの開始	返信	最新のトピック
TwitterのようなNon-Face-To-Face Communicationについて	 若本 夏美	117	
Recastについて	 若本 夏美	8	
Foreigner Talkについて	 若本 夏美	49	
Comprehensible (理解可能) について	 若本 夏美	0	
コミュニケーションの機会について	 若本 夏美	0	
One-To-One Communicationについて	 若本 夏美	0	

教えることによる学び

大学院文学研究科英語英文学専攻 長野 理瑛

私は外国語教育論Ⅱの TA として、毎週 Moodle 上に提出された課題の返信をすることを主に行いました。いわばテニスボールを打ち返すラケットのような役割です。初めは、約150人の課題の多さに圧倒されました。その際心掛けていたことは、1人1人の意見や感想に対して誠実に受けとめ、返信することです。「十人十色」という言葉があるように、学生の方々の意見や感想は多種多様であり、とても刺激的でした。的を射た意見や新たな観点から考えた意見など、多彩な視点があることに気づかされました。他の人と意見を交換し合い、共感を覚え、そして再び自分の意見を発するということは、自分の意見を整理して考えを深めることに繋がるのだと思いました。私自身も返信を繰り返すうちに、自分の意見を再考することができました。ディスカッションをするという過程は、感性や思考力を育むという発見がありました。また、TA という立場で授業に関わることは、一歩離れたところから学生の方々を見ているような感覚でした。TA の経験は感性や思考力を磨きながら客観的視点をどう構築するかについて考える重要な機会となりました。多くのことを学ばせていただき、ありがとうございました。

2013年度メルマガ「FD ニュース」の発行報告◆

月	ニュース	トピックス
4月	2013年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介
	研究者データベースについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
	クリッカー説明会について	
5月	2012年度秋学期成績資料の配付について	FD 関係資料の紹介
	研究者データベース外部公開画面の次回更新日について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	クリッカーについて	
6月	授業アンケート実施科目通知について	FD 関係資料の紹介
	研究者データベースについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
	クリッカーについて	
7月	2013年度春学期授業アンケートについて	FD 関係資料の紹介 FD 関係セミナー、講演会の案内
8月	休刊	休刊
9月	2013年度 FD 講習会の開催について	FD 関係資料の紹介
	科学研究費助成事業に関する学内説明会の開催について	FD 関係セミナー、講演会の案内
10月	研究業績及び教育活動に関する報告書の提出について（お願い）	FD 関係資料の紹介
	2013年度春学期授業アンケート実施結果について	FD 関係セミナー、講演会の案内
11月	2013年度オープンクラスのご案内	FD 関係資料の紹介
	2013年度秋学期授業アンケート実施について	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2013年度在学生アンケートの実施について	
	クリッカー（双方向対話型授業支援システム）について	
12月	教員研究・教育活動等報告書2013について	FD 関係資料の紹介
	第19回 FD フォーラムについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
	2013年度秋学期授業アンケートについて	
	総合文化研究所紀要第31巻について	
1月	教員研究・教育活動等報告書2013について	FD 関係資料の紹介
	2013年度秋学期授業アンケートについて	FD 関係セミナー、講演会の案内
	第19回 FD フォーラムについて	

FD 活動報告 (2013年度) ◆

分 類

- 1 本学 FD 事業関係
- 2 学外における FD 活動
- 3 FD 関係会議

1 本学 FD 事業関係

実施時期	活動内容等	実施組織等	概 要
3月	2013年度 新任教員対象 FD ガイダンス	総務部主催	新任教員に対し、本学 FD 事業のガイダンス実施 (懇談含む)
4月	2013年度 新入生アンケートの実施	教育・研究推進センター	新入生全員に対するアンケートを実施
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第45号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第45号の配信
5月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第46号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第46号の配信
6月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第47号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第47号の配信
7月	2013年度春学期授業 アンケートの実施	教育・研究推進センター	実施期間 7月8日(月)～7月30日(火)
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第48号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第48号の配信および嘱託講師への配布
8 9 月	2013年度春学期授業 アンケート実施結果の送付	教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2013年度春学期授業 アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果(全科目)を公開
	2013年度 FD 講習会の開催	教育・研究推進センター 主催	講演 『学生の目の色が変わる授業の仕方を内緒で教えます!』 講師 飯吉透氏 京都大学高等教育研究開発推進センター 教授
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第49号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第49号の配信および嘱託講師への配布
10月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第50号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第50号の配信および嘱託講師への配布
11月	2013年度在学生 アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	在学生全員に対するアンケート調査を実施
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第51号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第51号の配信および嘱託講師への配布
12月	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第52号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第52号の配信および嘱託講師への配布
	オープンクラスの実施	授業公開教員 授業参観教員 教育・研究推進センター	授業参観の実施(京田辺・今出川両キャンパスにて)

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
1月	2013年度秋学期授業アンケートの実施	全学部学科 教育・研究推進センター	実施期間 1月6日(月)～1月24日(金)
	FD 広報 メルマガ『FD ニュース』 第53号	教育・研究推進センター	メルマガ『FD ニュース』第53号の配信および嘱託講師への配布
	オープンクラス 参加者コメントの送付	授業公開教員 教育・研究推進センター	授業公開された教員に、授業参観参加者のコメントを送付
3月	2013年度秋学期授業アンケート実施結果の送付	全学部学科 教育・研究推進センター	授業アンケート実施結果の配布と授業評価コメントの作成依頼
	2013年度秋学期授業アンケート実施結果の公開	教育・研究推進センター	図書館にて授業アンケート実施結果(全科目)を公開
	FD レポート第7号の発行	教育・研究推進センター	全専任教員および各部署に配布

2 学外におけるFD活動

実施時期	活動内容等	参加者等	概要
5月	関西地区FD連絡協議会 第6回総会への参加	教員・職員	京都大学にて開催
6月	New Education EXPO への 参加	職員	株式会社内田洋行大阪支店にて開催
7月	「学びの空間が大学を変える」 セミナー参加	職員	東京大学本郷キャンパスにて開催
8月	近畿地区大学教育研究会 への参加	職員	武庫川女子大学中央キャンパスにて開催
9月	第10回 全国大学コンソー シアム研究交流フォーラム 参加	職員	同志社大学寒梅館にて開催
11月	武蔵大学 FD 講演 講師	所長	武蔵大学にて開催
1月	『教養の時代』がやってきた 三大学教養教育共同化フォー ラム 参加	教員	大学コンソーシアム京都にて開催
2月	園田学園女子大学 全学FD研修会 講師	所長	園田学園女子大学にて開催
	2013年度第19回FDフォー ラムへの参加	教員・職員	龍谷大学深草キャンパスにて開催

3 FD関係検討会議等

実施時期	活動内容等	実施組織等	概要
4月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2012年度在学生アンケートの実施結果について
6月	FD 推進事業内容について	センター主任会	在学生アンケートについて
7月	FD 推進事業内容について	センター主任会	在学生アンケートについて

実施時期	活動内容等	実施組織等	概 要
9月	FD 推進事業内容について	センター主任会	FD レポートについて
			在学生アンケートについて
			2013年度授業アンケートについて
			2013年度オープンクラスについて
10月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2013年度在学生アンケートについて
			2013年春学期授業アンケートについて
			2013年度オープンクラスについて
11月	FD 推進事業内容について	センター主任会	授業アンケートについて
1月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2014年度 FD 講習会 講師・テーマについて
			2014年度 FD 事業概要・日程について
2月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2014年度 FD 講演会 講演講師・テーマ等について
			2014年度授業アンケートについて
			2013年度在学生アンケートについて
			2014年度新入生アンケートについて
3月	FD 推進事業内容について	センター主任会	2014年度授業アンケートについて

2014年度 FD 事業の概要・日程◆

FD 事業概要

I 教育活動の公表
1. 本学教員の教育活動について、本学 HP 上の「研究者データベース」で公開する。 2. 本学教員の教育活動について、「教員研究・教育活動等報告書」として冊子で公表する。
II 授業アンケート
3. 「学生による授業評価」 授業アンケートを春秋年2回実施する。 4. 「科目区分代表者及び科目担当者へのフィードバック」 授業アンケート実施結果、及び2回) 5. 「授業の改善状況把握」 教員個々の授業アンケート実施結果を蓄積管理する。(紙、電子データ)
III 授業評価報告
6. 学生による授業アンケートの結果に対して科目担当者及び科目区分代表者がコメントを記載し、「授業評価報告」として図書館で公開する。(春秋年2回)
IV オープンクラス
7. 授業の改善を目的として「教員による授業参観」を実施する。
V FD 講習会等の開催・案内
8. 本学主催 FD 関係講習会等を開催する。 9. 学外で開催される FD 講習会等を学部学科、関係教員に案内し、FD に対する意識向上に努める。
VI 新任教員 FD ガイダンス
10. 本学 FD 事業に関わるガイダンスを、総務部が所管する入社前オリエンテーションの中で行う。
VII 新入生・在学生アンケート
11. 学生生活全般にわたる満足度、学業等における成長度、教育改善 (FD) 効果、本学への帰属意識等の実態について経年で把握できるようにする。
VIII FD の啓発・広報関係事業
12. FD 啓発誌「FD レポート」を発行する。(年1回) 13. メルマガ「FD ニュース」を配信する。(月1回配信) 14. 当センターの FD 事業内容及び FD 活動報告を本学ホームページ上で情報を公開する。
IX 教育開発・研究会等に関わる支援
15. 教育開発・各種研究会への支援 (FD-YG 会、GPA 検討会、e-learning 研究会、授業アンケート研究会)
X 大学院 FD 推進事業
16. 大学院生アンケートを実施する。 その他の FD 活動 (学部教育における FD 活動で対応)
XI その他 FD 関係の支援
17. FD 関係図書・資料等を収集し 教職員への貸し出し・利用に提供する。 18. FD 関係講習会等の参加費・出張費等を補助する。 19. クリッカーを教員に貸し出しする。 20. その他、本学 FD に関すること。

2014年度 FD 事業日程 (予定)

春学期

- 3月 ・ 新任教員入社前オリエンテーション FD ガイダンスの実施
- 4月 ・ 新入生アンケートの実施
- 7月 ・ 春学期授業アンケートの実施
- 8月 ・ 授業アンケート実施結果送付とコメント依頼
- 9月 ・ FD 講習会の開催

秋学期

- 11月 ・ 在学生アンケートの実施
・ 大学院生アンケートの実施
- 12月 ・ オープンクラスの実施
- 1月 ・ 秋学期授業アンケートの実施
- 2月 ・ 授業アンケート実施結果送付とコメント依頼
- 3月 ・ 大学コンソーシアム京都主催「FD フォーラム」への参加
(各学科2名以上の参加を依頼)
・ 「教員研究・教育活動等報告書」の発行
・ 「FD レポート」の発行

年間を通して

- クリッカー貸し出し
- 「FD-YG 会」および教育開発に関わるセミナー・研究会を支援
- 学外で開催される FD 関係講習会等を案内、参加費・出張費等の補助
- FD 関係資料・図書等を収集、貸し出し
- メールマガジン「同女 FD ニュース」を配信 (月1回配信)

編集後記

本学におけるさまざまなFD活動の周知により、その推進・強化を目指して、2008年以降毎年度末に刊行されてきた本誌も、今回で第7号となる。図書の紹介や主な行事のレポート、また種々のご報告に至るまで、本誌の刊行にあたりご投稿、ご協力いただいたすべての皆さまへ、まずは心より感謝申し上げたい。

今年度においては『学生の目の色が変わる授業の仕方を内緒で教えます』と題し、京都大学・高等教育研究開発推進センター・飯吉透教授によるオープンエデュケーションにかかわる海外および国内での現状報告など“ハイペース”で“パワフル”な動画等を交えた一部で刺激のかつ非常に興味深い内容に満ちたFD講習会が開催された。この“キャッチー”な演題を含め、本講習会では、内容による高ぶりと併せて、多くの先生方ご参加のもと、飯吉先生のお話しぶりやその映像等を扱う際の手順等の細部に至るまで講習会としてまさに充実のひとつときであったという旨のご感想も多数いただき、今後の開催へ向けた弾みのひとつと考えている。また、新任教員を対象とする「FDガイダンス」や、本学FD推進事業としての「オープンクラス（授業参観）」なども例年どおり実施することができ、さらには各種学生アンケートや2月開催の大学コンソーシアム京都主催・第19回FDフォーラムへのご参加など、多くの皆さまにご協力いただいた。しかし他方で「FD-YG会」が昨年度後半に引き続き開催見送りとなるなど、今後のさらなる展開にむけ検討すべき課題が多いのも現状である。

皆さまにおいては、こうした課題に向けたご意見などを今後ますますお寄せいただければ幸いである。

教育・研究推進センター主任 山本 裕樹

FDレポート 第7号

2014年 3月 発行
同志社女子大学 教育・研究推進センター
〒610-0395 京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8679 FAX (0774) 65-8680
E-mail:kyoiku-i@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ <http://www.dwc.doshisha.ac.jp>

